

仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵の第3堤整備工事予定区域の事前調査

はじめに

仁徳天皇百舌鳥耳原中陵は大阪府堺市堺区大仙町に所在する。三重の周濠をもつ日本最大の前方後円墳であり、遺跡としての名称は大山古墳である。今回の調査は、今後の実施が想定される当陵北西側の第3堤、第3濠における保全整備工事計画を策定するにあたって、その基礎となる情報を収集するために実施したものである。今回の調査では当陵北西の第3堤に4本、渡土堤に1本、第3濠に1本、第2堤に1本のトレンチを設定することとした。調査期間は、令和6年（2024）11月6日～12月10日であった。調査は当庁書陵部陵墓課陵墓調査室の土屋隆史・田中詢弥・足達悠紀が担当した。

今回の報告で使用する座標は、ITRF（国際地球基準座標系）にもとづいた世界測地系の平面直角座標第VI系をもちいており、高さの基準には東京湾平均海面（T.P.）をもちいた。以下では調査の内容について報告をおこなうが、調査と同時に第2濠、第2堤、第3濠、第3堤の地上レーザー測量も実施したので、その成果もあわせて報告することとしたい。なお、調査にあたり、堺市文化財課の永井正浩氏、相馬勇介氏、富島健司氏には現地でご指導を頂いた。特に相馬氏からは出土遺物の位置づけをご教示いただくとともに、関連文献を複数提供頂いた。謝意を申し上げたい。また、堺市立埋蔵文化財センターの續伸一郎氏には出土陶磁器類の鑑定、奥田尚氏には出土石材の鑑定を依頼し、ご教示を頂いた。（土屋隆史）

1. 第3濠をめぐる近世から近代にかけての文書・絵図の調査

これまで当陵第3濠をめぐる様々な見解が指摘されてきた。先行研究では、第3濠が築造当初のものではないとする見解（森浩一）と築造当初のものであるとする見解（中井正弘ら）がみられる。森浩一は、この濠は陪塚の円墳に三箇所を衝突し、そこを迂回して不自然であること、大型の前方後円墳には二重濠の類例は奈良市の磐之媛陵や大阪府美陵町の允恭陵などにあるが三重濠の例はないことから、三重めの濠は、考古学的に検討しても納得できないと指摘した⁽¹⁾。

一方、中井正弘らは主に江戸時代における当陵の絵図や文書を根拠に、第3濠が築造当初のものであることを指摘した⁽²⁾。例えば、享保十五庚戌十一月二十五日（1730年11月25日）に作成された『舩松領絵図（上）』（堺市立図書館所蔵 管理ID S0010937）では南西部に「長池」が表現されており、これが第3濠の残存部分にあたりと指摘される。他にも、津久井清影「和泉国百舌鳥耳原三陵之図」『聖蹟図志』、1854年（国立公文書館デジタルアーカイブ 請求番号：144-0225）には北西側に「三重池」が描かれていることも挙げられる。

さらに中井らは、『大仙陵新開之帳』（大阪大谷大学博物館所蔵）に、元禄4～8年（1691～1695）にかけて幕府の新田開発政策によって第3濠を埋めて開墾されたと記載されていることを紹介する。また、松葉好太郎『陵墓誌一 古市部見廻区域内』、1922年（宮内庁図書寮文庫函架番号：A1・1778）に「自明治三十二年至同三十五年、明治二十九年買上げられし二重隄堤防の改修工事竣功、又道路の附替拡張、三重隄堤防の修築、排水口の新設等、年々の継続事業として、近年漸く完成せり。」とあり、明治32～35年（1899～1902）にかけて、明治政府によって第3濠が復旧（再掘削）されたことも紹介されている。絵図や文書に基づくこれらの考証には説得力がある。

また近年、宮内庁宮内公文書館と堺市博物館による共催展で『仁徳天皇陵と近代の堺』という展示会が開催された。この図録において、第3濠にかんする宮内公文書館の公文書が紹介されている⁽³⁾。「明治27年 舩松村・向井村両村長による第三濠復旧の嘆願書」『陵墓地録 明治29年』（宮内公文書館所蔵、識別番号：2430）では、元禄4～8年（1691～1695）にかけて、幕府の新田開発政策によって第3濠を埋めて開墾されたことが述べられている⁽⁴⁾。また、「明治27年 仁徳天皇御陵之図」『陵墓地録 明治29年』（宮内公文書

館所蔵、識別番号：2430）（図版22-3）では、第3濠の旧跡と思われる場所（道路より低い場所、ため池となっている場所、田畑となっている場所に隠々に存在する境界、境界ははっきりしないが旧跡であると考えられる場所）を利用して第3濠の復元ラインが設計され、明治32～35年（1899～1902）にかけて、明治政府によって第3濠が復旧（再掘削）されたことが示されている。

このように、江戸時代の文書・絵図や宮内公文書館所蔵の明治時代の公文書の考証から、第3濠が元禄4年～8年に埋め立てられ、明治32～35年（1899～1902）にかけて、明治政府によって復旧（再掘削）されたことが明らかにされた。ただ、「明治27年 仁徳天皇御陵之図」にあるように、道路よりも低い場所等の第3濠の旧跡を根拠に再掘削がなされたが、城内陪冢茶山や大安寺山は設計図では第3濠が両隣にぶつかるように描かれている。だが、現状では第3濠はこれらを迂回するように設けられている。明治32～35年の工事の際の判断で城内陪冢茶山や大安寺山では第3濠施工場所の設計変更がなされたようであり、そうであるとするとこれらの周りの第3濠の形態には復元根拠がないことになる。森が指摘するような不自然さを射ているだろう。つまり、第3濠が築造当初からあった可能性は極めて高いが、その形態には明治32～35年時の判断が反映されており、築造当初と同じ形態であるとは限らないという点に注意が必要である。

（土屋）

2. 第2濠、第2堤、第3濠、第3堤の現況

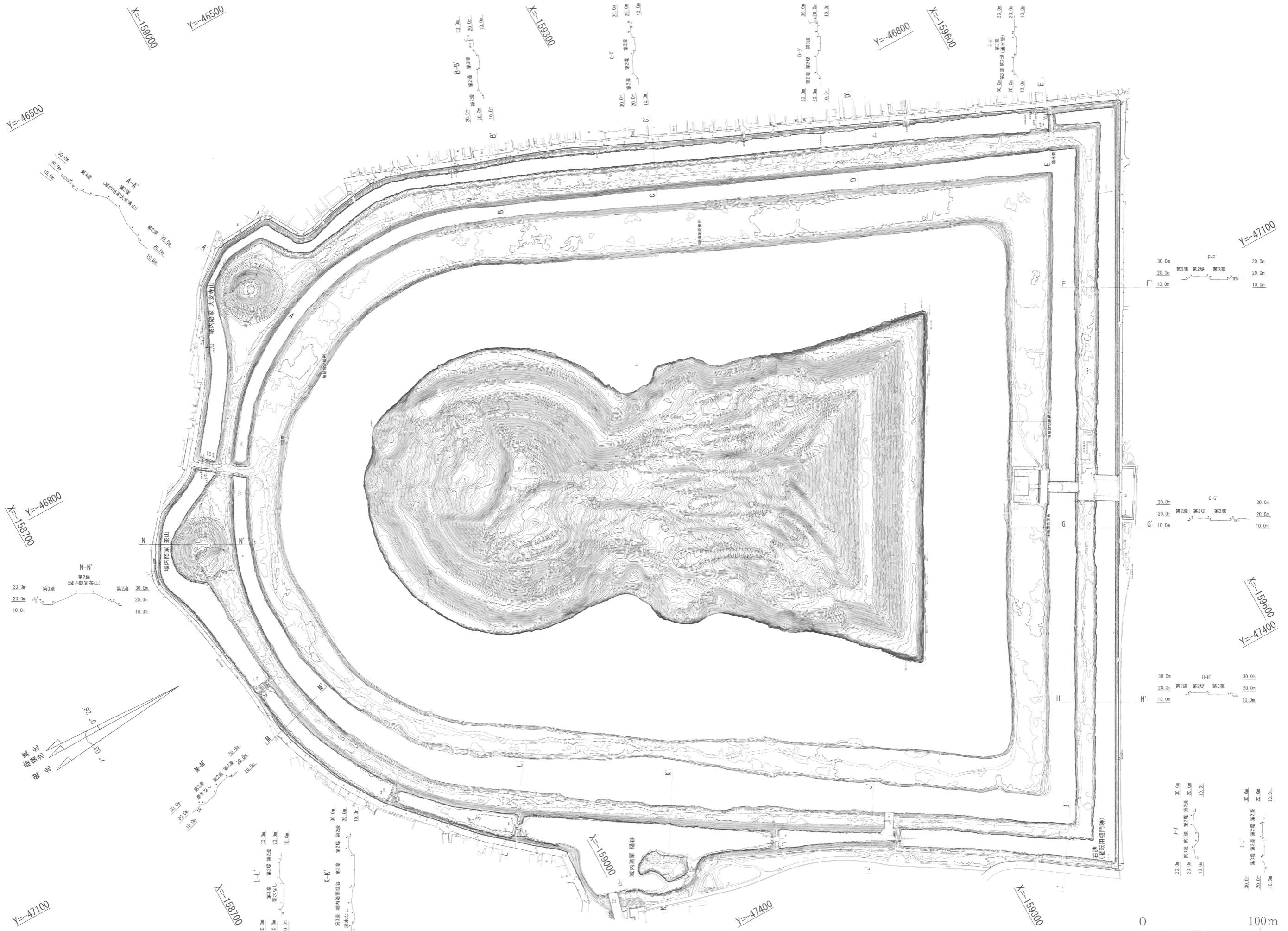
第2堤、第3濠、第3堤の事前調査と併行して、将来的に工事によって改変される可能性がある部分を記録するため、当陵の現況測量図を継続的に作成している。平成30年度の調査では第1堤部分を、令和3年度の調査では墳塋部分、そして令和6年度には第2濠、第2堤、第3濠、第3堤の現況測量図を作成した。これらを統合し、当陵の現状について述べる（第1～3図）。図面上で方位記号の指し示す方角は座標北である。また、高さの基準面は東京湾平均海面（T.P.）を用いる。なお、当陵におけるそれぞれの渡土堤の名称は、管理担当者が用いている「第3濠第1渡土堤」（第1図参照）のような名称を用いることとする。

（1）第2濠、第2堤、第3濠、第3堤の特徴

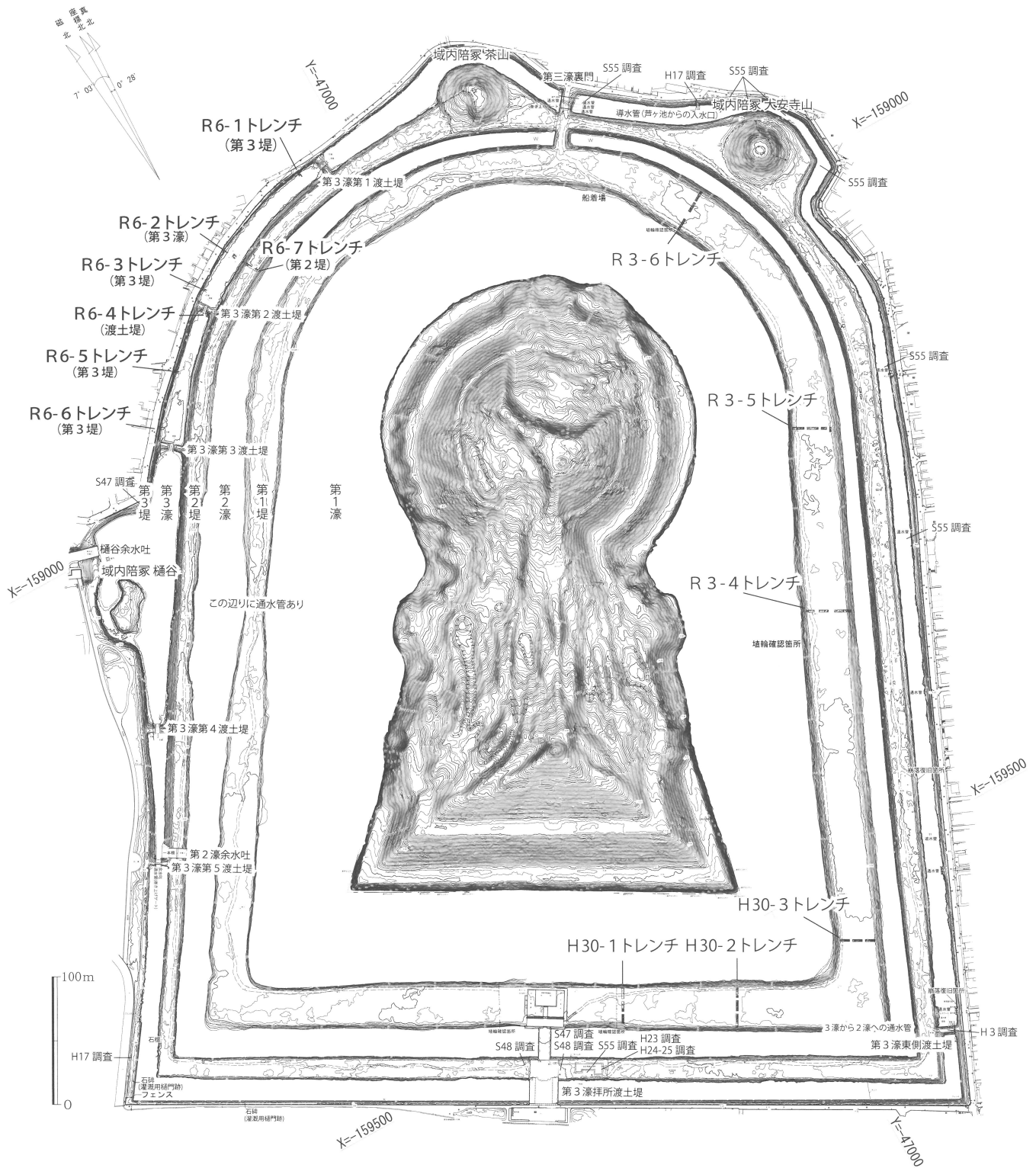
第2濠と第2堤の現況について、新たな測量図や周辺の地形をもとにして述べる。まずは地点ごとの標高の違いに注目する。第2濠の水面はどの地点においても標高約17mにあり、第1濠の水面標高とほぼ同じである。一方、第2堤の平坦面の標高は場所によって違いがあり、平坦面から水面までの比高差は場所によって異なっている。第2堤平坦面で最も高い地点は北東側（R3-4、5トレンチ付近）の標高20.5mであり、水面との比高差は約3.5mである。第2堤平坦面で最も低い地点は西側（城内陪冢樋谷付近）の標高約17.75mであり、水面との比高差は約0.75mである（この付近に第2濠と第3濠を繋ぐ通水管が設置されている）。水面の高さは一定であるが、西側の地形が低くなるため第2堤平坦面も低くなり、西に行くにつれて第2堤平坦面と第2濠水面の比高差は小さくなるようである。

また第2堤の残存幅を比較してみると、北東側が最も幅広であり（R3-5トレンチと6トレンチの中間付近）、西側（城内陪冢樋谷付近）や南西側（第2堤南西隅付近）は幅狭となっている。先述したとおり第3濠は元禄期に一度埋め立てられてから、明治期に再掘削されており、その際に本来の第2堤幅が変わってしまった可能性がある。また江戸時代の絵図（江戸時代の享保年間（1716～1735）に描かれた「大仙陵絵図」（原本：南家所蔵、写：堺市立図書館所蔵）や、享保15年（1730）に描かれた『舩松領絵図』（原本：南家所蔵、写：堺市立図書館所蔵）、文久年間（1861～1864年）に鶴澤探真によって描かれた『山陵図』⁵の「仁徳帝 百舌鳥耳原中陵 荒蕪」）にあるように、江戸時代には城内陪冢樋谷付近の西側で第1堤が切れて第1、2濠が一体化しており、この付近の第2堤が水圧等で削平された可能性も考えられる。第2堤西側が幅狭となっている状況が築造当初の姿であるのか、後世の改変の結果であるのかは確定することが難しい。

また、第2濠には2つの渡土堤（拝所、裏門）、第3濠には8つの渡土堤（拝所、裏門、第3濠第1～5渡土堤、第3濠東側渡土堤）がみられる。現在のところ、拝所と裏門の渡土堤は参拝と管理用、第3濠第1～5渡土堤は濠水量を調整して樋谷に濠水を流すため、第3濠東側渡土堤は第3濠南東側の濠水を堰き止めて北側に

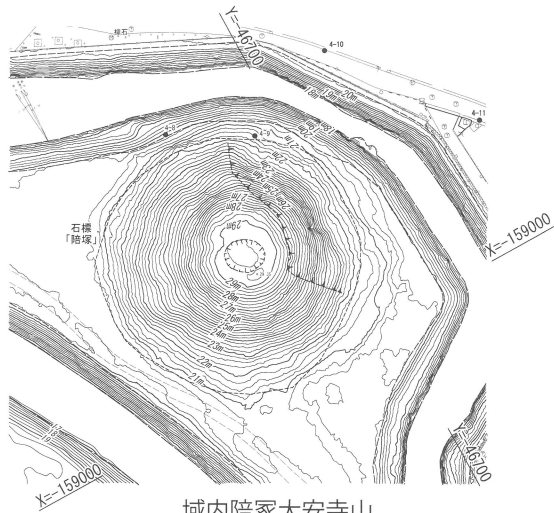


第1図 百舌鳥耳原中陵 墳塋・第1堤・第2堤・第3堤の現況測量図・断面図(s=1/3,000)

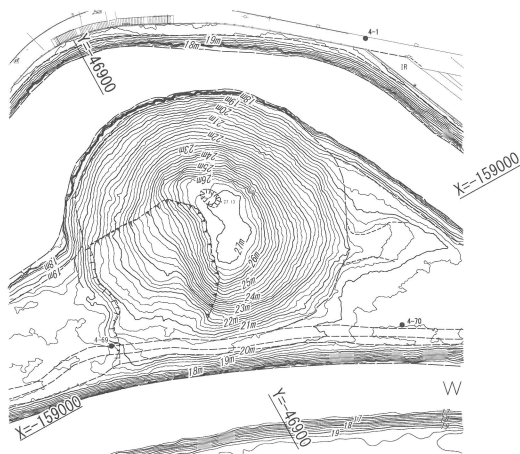


第2図 百舌鳥耳原中陵 墳塋・第1堤・第2堤・第3堤の現況測量図とトレンチ配置図(1/4,500)

流し、さらに通水管を使って第2濠に水を流すために用いられている。現状のこれらの渡土堤には余水吐や通水管が設置されており、高さもあることから、大部分は明治32～35年の第3濠復旧の際に造られたと考えられる。ただし第3章で述べるとおり、第3濠東側渡土堤では地山削り出しで渡土堤が造られていることが確認されており、築造当時のものである可能性がある。他の箇所においても現状の渡土堤の下に本来の渡土堤があるかもしれない。



域内陪冢大安寺山



域内陪冢茶山



域内陪冢樋谷



第3図 域内陪冢の現況測量図 (1/1,500)

第3濠の沿革については第1章で先述したとおりであり、ある程度は築造当初の形態が反映されているであろうが、厳密には明治32～35年時点での判断で第3濠の大部分が掘削されたと考えられる。現状の第3濠の形態は築造当初とは異なる可能性が高い。また第3堤は今回の調査でも確認されているが、現状の高まりの大部分は近世以降の造成土でできており、築造当初の形態は現在の地形からは推測が難しい。第3堤南西側には灌漑用樋門跡の石碑が二箇所確認されている。(土屋)

(2) 域内陪冢の特徴

第2堤北部には域内陪冢茶山、第2堤北東部には域内陪冢大安寺山、第3濠西側には域内陪冢樋谷がみられる。森浩一が指摘するとおり、第3濠は陪冢の円墳に三箇所衝突し、そこを迂回して不自然である⁽⁶⁾。先述したとおり、第3濠の大部分は明治32～35年時点での判断で掘削されたと考えられ、域内陪冢周囲の第3濠の形態は、築造当初の形態ではない可能性が考えられる。

① 大安寺山

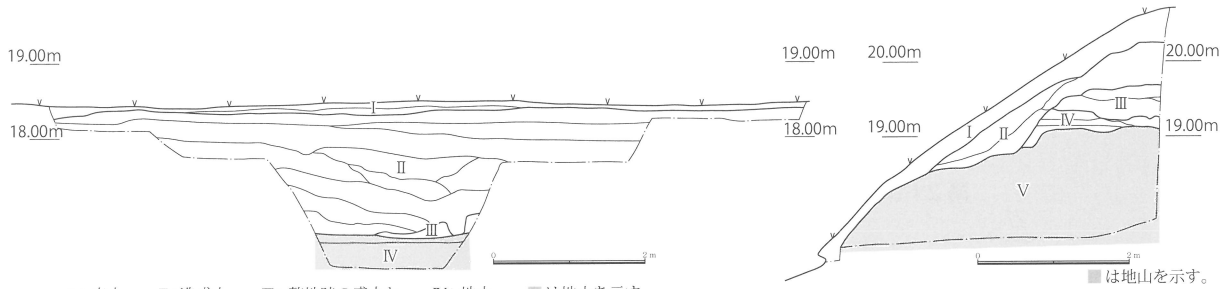
第3図は域内陪冢を抽出した図面であり、傾斜変換点を破線で表現している。大安寺山は最大径約49.7m、最大高約8.6mの円墳であり、東側の大部分は崩落している。現状では明確な段築構造は確認できない。墳頂中央には約8.0×6.4mの穴がみられ、盗掘穴か埋葬施設の陥没痕跡であると考えられる。墳裾南側には高まりがあり、低い造出や前方部のような遺構があった可能性がある。

② 茶山

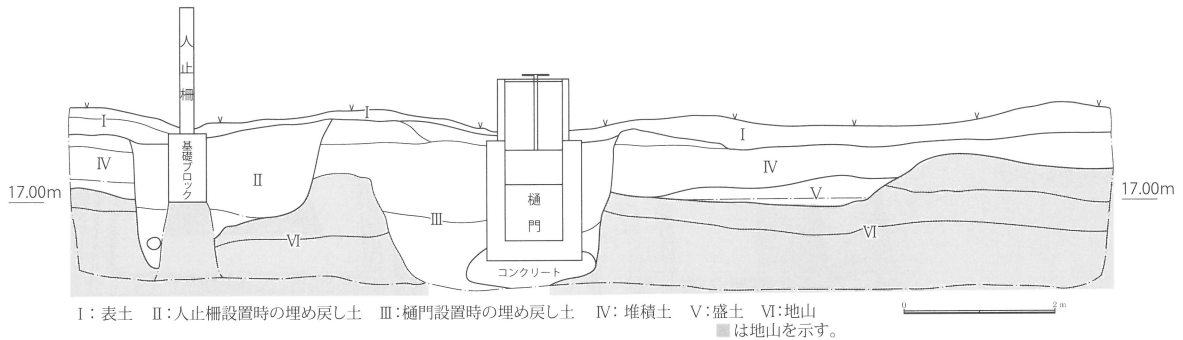
茶山は、北側において第2堤斜面と墳丘斜面の傾斜が一体化している。築造当初は現状より北側に墳裾の傾斜変換点があった可能性がある。最大径約51.5m、最大高は南側で約6.6m、北側で約8.5mである。西側の大部分は崩落している。北西側と南東側の墳丘中では傾斜が変わる箇所があるが、築造当初のものか明確ではなく、現状では段築構造は確認できない。墳頂北側には約4.3×2.9mの穴がみられ、盗掘穴か埋葬施設の陥没痕跡であると考えられる。墳裾南東側には高まりがあり、低い造出や前方部のような遺構があった可能性がある。

③ 樋谷

樋谷は、第3濠の濠水排出口に位置する。明治32～35年の工事の際、第3堤第1～5渡土堤を用いて樋谷に濠水が集まるように設計されており、域内陪冢樋谷周辺の濠は幅広くなっている。域内陪冢樋谷の形態は不整形であり、最大長約43.4m、最大幅約23.9m、最大高2.64



I:表土 II:造成土 III:整地時の盛土か IV:地山 ■は地山を示す。
 平成23年度 百舌鳥部事務所改築工事に伴う事前調査 土層断面図(東壁) (1/100)
 I:表土 II:近年の造成土 III:造成土 IV:旧表土 V:地山 ■は地山を示す。
 平成18年度 導水管設置工事に伴う立会調査 土層断面図(西壁) (1/100)
 (『書陵部紀要』第64号〔陵墓篇〕81頁28図を再トレース・一部加筆修正) (『書陵部紀要』第58号78頁54図を再トレース・一部加筆修正)



I:表土 II:人止柵設置時の埋め戻し土 III:樋門設置時の埋め戻し土 IV:堆積土 V:盛土 VI:地山 ■は地山を示す。
 平成3年度 渡土堤漏水留工事箇所立会調査 土層断面図(南壁) (1/100)
 (『陵墓調査録平成4年』より、土層断面図を再トレース・一部加筆修正)
 第4図 百舌鳥耳原中陵 既往の調査 土層断面図(1/100)

mである。裾から約1mの高さまでは急傾斜であるが、上側では傾斜が緩やかになっており、大安寺山や茶山のような墳丘にはみえない。

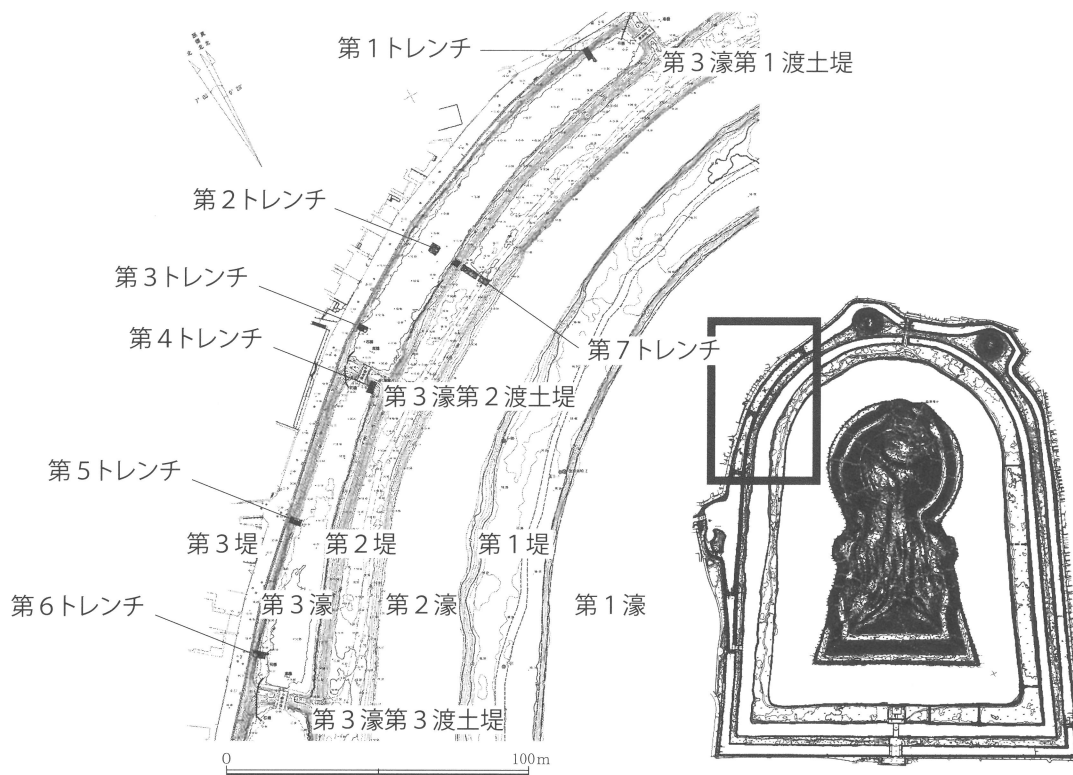
享保15年(1730)に描かれた『舩松領絵図』(南家所蔵、写:堺市立図書館所蔵)には樋谷と思われる塚が描かれており、この時には東側のみが濠に面していたようである。また、「仁徳天皇御陵増設地実測図(縮尺1200分の1)」『陵墓地録 明治22年』明治21年(1888)(宮内公文書館所蔵、識別番号:2528)(図版22-2)には、樋谷が「陪塚」として描かれており、周囲には濠が巡っている。さらに、「明治27年 仁徳天皇御陵之図」『陵墓地録 明治29年』(宮内公文書館所蔵、識別番号:2430)(図版22-3)は先述した第3濠復旧時の実測図であるが、樋谷の箇所はやはり「陪塚」と書かれている。このように、樋谷は享保15年から既にみられ、第3濠の復旧前から塚として認識されていたことがわかる。このことをふまえると、現状では墳丘のようにみえないが、元々は墳丘があった可能性が考えられる。これらの陪塚は当陵の墳塋にも近接し、かつ規模も大きい。外側の他の陪塚よりも階層的に高く位置づけられていたと考えられる。(土屋)

3. 第2・3堤における既往の調査

当陵の第2堤・3堤及び第3濠では、工事に伴う複数の調査が実施されており(第1図)、土層や遺物の確認が進められてきた。以下にその概要を述べる⁽⁷⁾。

(1) 第2堤

昭和47年度に、陵前に所在する旧百舌鳥部事務所改築に伴う調査が実施され、最大1.5mの掘削が行われた。この調査では、ブロック状の黄褐色粘質土と砂礫の混じった層が厚く堆積していることが確認された。この層からは埴輪片のほか、室町時代末の瓦片・江戸時代の陶器片が出土しており、明治時代に濠の浚渫土を盛り上げたものではないかと指摘されている⁽⁸⁾。その後、野犬防止柵設置箇所の調査⁽⁹⁾や百舌鳥部事務所車庫設置区域の調査⁽¹⁰⁾が行われ、昭和47年度調査時と同様の土層が確認された。また、平成23年度に実施された事務所改築工事箇所の事前調査⁽¹¹⁾では、1.4mほど堆積したブロック状の黄褐色粘質土(造成土)の下から、



第5図 百舌鳥耳原中陵 トレンチ配置図(1/2,500)

地表下約1.8m(標高16.7m)で地山が検出された(第4図左上)。黄褐色粘質土は、濠内の堆積土を浚渫したと考えられる灰色の土と、地山起源と考えられる黄色を帯びた土から構成されている。また地山の直上には、わずかではあるが非常に均質な灰白色の粘質土が確認され、この層の時期と性格は不明であるものの、堤体を築く前の整地によるものである可能性が指摘されている。更に、平成24年度に実施された百舌鳥部事務所建替工事箇所での立会調査では、深さ0.6mを掘削した結果、従前の調査と同様の造成土層の中から、摩耗した埴輪片と近世の瓦質の井戸杵材が出土している⁽¹²⁾。

(2) 第3濠・第3堤

昭和47年度に当陵西側の樋谷付近で護岸工事に向けた調査が実施されている。この調査では、調査範囲西側で黄褐色粘質土が、東側斜面では堅い砂礫層が認められた⁽¹³⁾。あわせて、昭和55年度の浚渫工事に伴う調査では、濠が地山を削ることによって形成された可能性が高いこと、また地山上には直接ヘドロが堆積していることが示された⁽¹⁴⁾。また、平成17年度に実施された仁徳天皇陵西側の外構柵整備工事に伴う立会調査では、南西側の掘削箇所で、地表下85cm程度(標高166m)で地山らしき層が確認されている⁽¹⁵⁾。同じく平成17年度には後円部北側の第3堤(域内陪冢大安寺山の向かい)で導水管設置工事に伴う調査が行われた⁽¹⁶⁾。第3堤側の標高約19m付近で地山が確認され第3濠に向かって地山が下がることが示された。地山の上には旧表土と考えられる黒色土の層が認められ、その上に造成土が確認されている(第4図右上)。

(3) 渡土堤

平成3年度に第3濠東側渡土堤の漏水留工事箇所の調査が実施された(第4図下)⁽¹⁷⁾。この調査では、地山が調査時の水面よりも高いところ(標高17.3m付近)にあり、築造時よりこの部分を掘り残して渡土堤を構築したと指摘されている。(足達悠紀)

4. トレンチの設定と基本層序

(1) トレンチの設定

本調査のトレンチは、当陵第2堤北西側及び第3濠、第3堤に計7箇所設定している(第5図)。各トレ

ンチの呼称は、北から第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチ、第4トレンチ、第5トレンチ、第6トレンチ、第2堤上のは第7トレンチとなっている。なお、第2図では過去のトレンチと区別するため、本調査のトレンチにはR6と付けている。第1、第3、第5、第6トレンチ（幅2m×長さ4m）は、第3堤の護岸工事にあたり、第3堤の本来の面を探るため、第3堤と第3濠の境界に対応するように設定した。第2トレンチ（幅3m×長さ3m）は第3濠の浚渫工事にあたり、濠底の深さを確認するために第3濠中央部に設定した。第4トレンチ（幅2m×長さ4m）は第3濠第2渡土堤の本来の面、第3濠第2渡土堤と第2堤の接合状況を探るため、第3濠第2渡土堤に直交するように設定した。第7トレンチは第2堤の本来の面を探るために、第2堤上と第3濠側斜面に設け、第2トレンチと直線になるように設定した。

第1トレンチ、第3から第6トレンチは幅2mで、長さは4m前後となっている。第7トレンチは幅2mで約13mの長さとなっているため、通路を兼ねた畦を2箇所設けている。この畦によってトレンチは区分されることとなるため、第2濠に近い区画から第7-1、第7-2、第7-3と呼称したい。（田中詢弥）

（2）基本層序

今回の調査トレンチはそれぞれ大きく離れた位置に設定されており、土層の細かな特徴については各トレンチにおける説明に委ねたい。ただし、土層のおおまかな傾向を示しておく必要もあることから、以下では今回の調査において確認しえた基本的な層序について示しておく。

I層 表土。現在の地表面を覆う腐植土層である。

II層 堆積土。造成土の上に堆積した土である。

III層 造成土。現状の第2堤および第3堤を形成する盛土である。盛土のタイミングや土は一様ではない。埴輪片や陶磁器片、瓦片を含む。第1章の検討のとおり、元禄4～8年に第3濠が埋め立てられ、明治32～35年に再掘削がなされたことがわかっており、この土層の大部分は第3濠の埋土が再掘削によって盛り上げられたものと考えられる。なお、第4トレンチで確認された渡土堤の盛土については、近世以降に構築されていることから、この層に含む。

IV層 濠内堆積土。濠内に堆積した土層である。

V層 流土。第2堤や第3堤が完成した際の面である盛土層が雨水や木の根などによる攪乱を受けて自然流出したと考えられる土層である。埴輪片や土器片を含む。

VI層 盛土。第2堤および第3堤を構築する際に地山上に盛られた土で、基本的には当陵を築造する際に濠を掘削して生じた土を用いたものと推測される。各トレンチでその土色や土質は異なっており、詳細についてはそれぞれのトレンチで報告する。

VII層 地山。当陵の築造以前に形成されていた土層で、当陵築造時に整形されて基盤になった面といえる。各トレンチでその土色や土質は異なっており、詳細についてはそれぞれのトレンチで報告する。

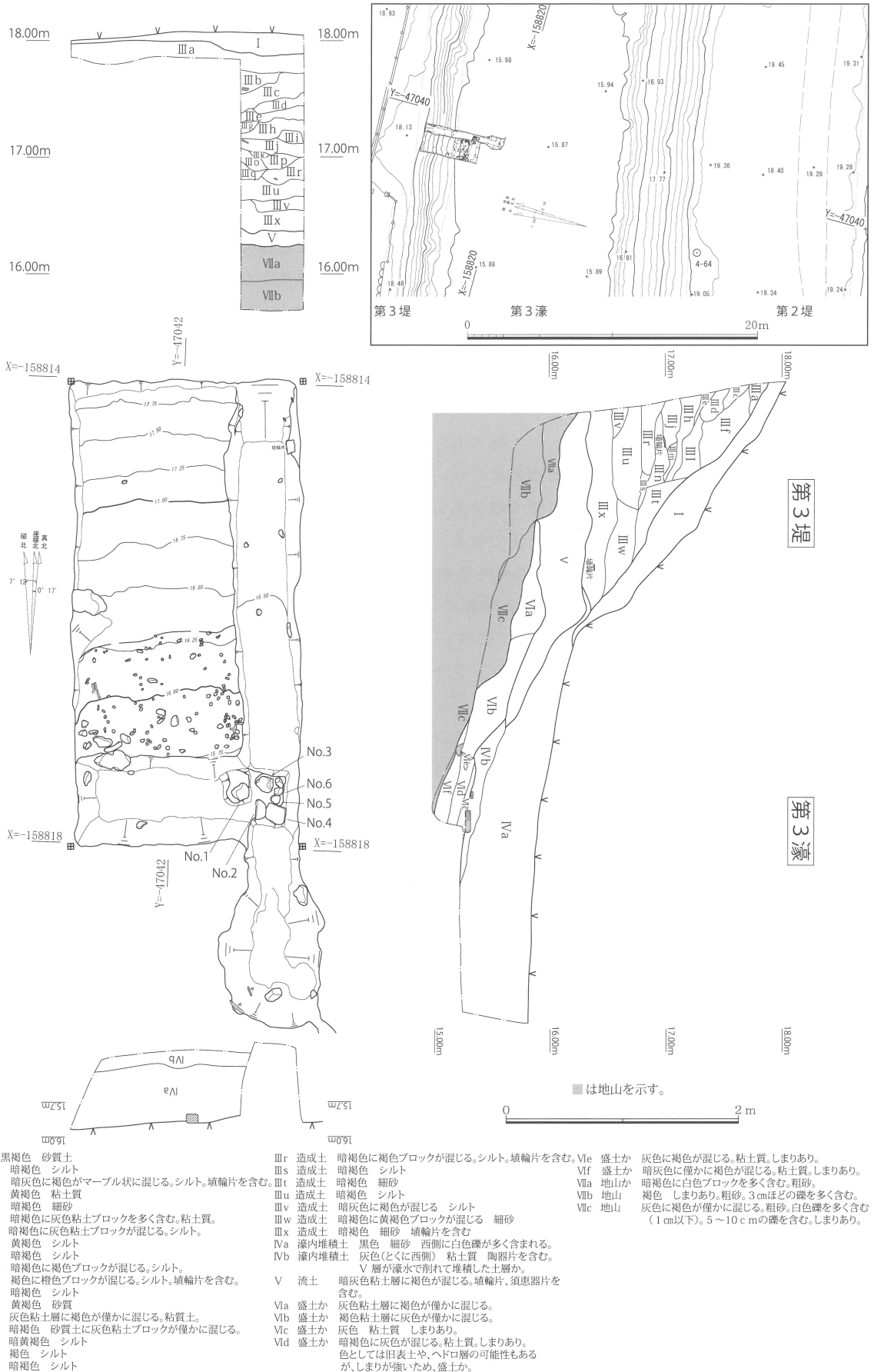
なお、各トレンチの解説では、それぞれの土層をIII a、IV bなどと細別しており、共通する表記がトレンチを超えて存在する。これについては、土質がトレンチを超えて一致していることを示すわけではなく、それぞれのトレンチで土質は異なっていることに留意されたい。ただし、VI a層であれば、VI層＝盛土という大枠の理解については共通している。（田中）

5. 各トレンチの概要

今回の調査では第2堤の第7トレンチ、渡土堤の第4トレンチ、第3堤の第6トレンチから掘り進めていったが、どのトレンチにおいても造成土（III層）が非常に分厚く確認されることが調査初期に判明した。主に掘削土量の関係で全てのトレンチで造成土を高さ2m近く掘り下げることが困難であったため、今回は各トレンチの片側に幅50～60cmのサブトレンチを設置し、サブトレンチの箇所を主に掘削することで土層や遺構の状況を確認するという手法をとった。以下、各トレンチの概要を述べる。

（1）第3堤

①第1トレンチ（第6図、図版13-1～6）



第6図 百舌鳥耳原中陵 第3堤 第1トレンチ平面図・断面図 (1/50、1/400)

第1トレンチは第3濠第1渡土堤の西側に位置し、第3堤に直交するように設定したトレンチである。大きさは、幅約2m、長さ約4mのトレンチであり、水抜きのための釜場を設置したため、第3濠側に約1.5m伸びた箇所がある。本トレンチでは、第3堤構築のための盛土と地山を検出することができた。第5、6トレンチでは盛土はみられず、地山も第3堤側に水平に続いていることから、築造当初の第3堤は残存していないが、第1トレンチ周辺は築造当初の第3堤が残存していると考えられる。

確認された土層は、上から表土（I）、近世以降の造成土（Ⅲa～x）、濠内堆積土（Ⅳa～b）、流土（V）、盛土（Ⅵa～f）、地山（Ⅶa～c）である。第1トレンチでは造成土（Ⅲ）と地山（Ⅶ）の間に盛土（Ⅵ）が確認できる点が、第3、5、6トレンチとは異なっている。

表土（I）下からは19世紀頃の堺播鉢片（第15図26）が出土した。造成土（Ⅲ）は約1.7mの高さで確認され、現状の第3堤の高さの要因となっている。造成土中からは17世紀前～中葉頃の陶磁器片や播鉢片、15～16世紀の龍泉窯青磁碗（第14図2、3）、円筒埴輪片（第13図4）が含まれる点が特徴である。造成土の下側には、主に第3濠側で濠内堆積土（Ⅳ）が0.6mほどの高さで確認された。また、濠内堆積土中からは17世紀頃の陶磁器片、近代の播鉢片、アスファルトが付着した部材やコンクリート部材、煉瓦（第16図48）などが出土していることから、現代に形成された土層であると考えられる。造成土の下からは流土（V）が0.4mほどの高さで確認された。この層からは多くの円筒埴輪片（第13図3）と1点の須恵器片（第13図1）が出土したことから、第3堤斜面の流土であると考えられる。流土の下からは、第3堤構築のための盛土（Ⅵ）が0.3mほどの高さで確認された。ここでは土層の色調が一定ではなく、下から積み上げられるような特徴がみられ、遺物が含まれていないことから、盛土と判断した。とくにトレンチ斜面下側の盛土（Ⅵc～f）は薄いがしまりが強いという特徴がある。

トレンチ斜面下の盛土上側からは石材が6点検出された。石材は長辺8～18cmの大きさであり平坦面が外を向いた状態で検出された。調査当時は葺石の可能性もあって考えていたが、洗浄後、奥田尚氏に鑑定をして頂いたところ、第6図No.1はコールタールが塗られたコンクリート部材、No.2は窪みのある叩き台、No.4は錘である可能性が高いことが判明した。またNo.5は正珪岩であり葺石に使われる石材ではなく、葺石の可能性が考えられるのはNo.3、6の川原石のみであるようである。これらをふまえると、トレンチ斜面下でまとまる石材は葺石ではなく、後世に投棄された遺物が集積したものであると考えられる。

盛土の下からは粗砂や礫を多く含む地山（Ⅶa～c）を検出した。先述したとおり、トレンチ斜面下から立ち上がるように地山が検出されており、盛土と平行に続いている。このことから、地山を削り出して第3堤斜面が形成されたと考えられる。当トレンチで確認された地山（Ⅶa、Ⅶc）上面の標高は15.00～16.25mである。

このトレンチ内では先述したとおり、Ⅲ～V層を主として遺物が出土した。計85点で、そのほとんどは近世以降の遺物であり、トレンチ内の第3濠側から集中して出土した。（土屋）

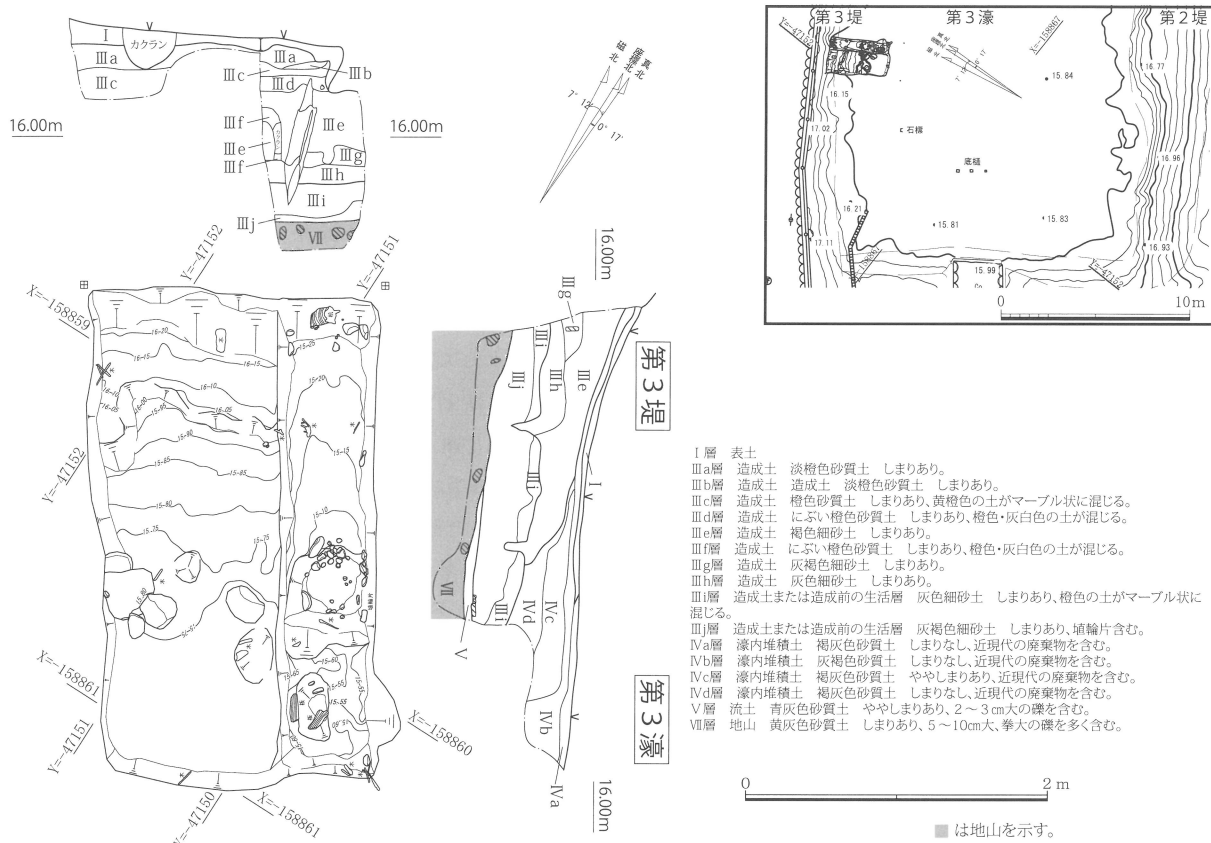
②第3トレンチ（第7図、図版14-1～5）

第3トレンチは第2トレンチの西側に位置し、第3濠から第3堤にかけて設定している。地形の特徴として、西に向かって地形が下がることから、第1トレンチに比べ道路路面との比高が小さい。また、後述する第4から第6トレンチ地点より濠底の標高が高いことから、濠との比高も小さい。

トレンチの幅は約2m、長さは4mで設定したがヘドロ層が厚く水が湧き出てくる関係で実際には第3堤から3mの長さで掘削した。トレンチ東壁に沿って幅70cmの断割を設けた。確認された土層は、上から表土（I）、造成土（Ⅲ）、濠内堆積土（Ⅳ）、流土（V）、地山（Ⅶ）で、当陵を築造する際に構築された盛土は確認されていない。

地表下約0.8mから検出された地山上面の標高は南端部で15.1m、北端部で15.45mと、北に向かって緩やかに登っており、第3堤があった古墳時代の濠の幅に近いと考えられる。

調査では近世以降の陵墓管理に伴う木杭を確認した。木杭は長さ約0.8m、直径約0.12mの円柱を呈しており、先端部はとがらせている。本トレンチでは62点の遺物が出土しているが、造成土からは近世の遺物、



第7図 百舌鳥耳原中陵 第3堤 第3トレンチ平面図・断面図(1/50、1/400)

第3濠側の流土からは多量の埴輪片が出土した。埴輪片はいずれも円筒埴輪で、突帯のある表面を上にし、横になった状態で出土した。地山の上に薄く堆積した流土の直上から出土したことから、第3濠が構築され、しばらく機能した後に、第3堤側に設置されていた埴輪が濠に崩落したと考えられる。この層からは他時代の遺物は出土していない。(田中)

③第5トレンチ(第8図、図版15-1~4)

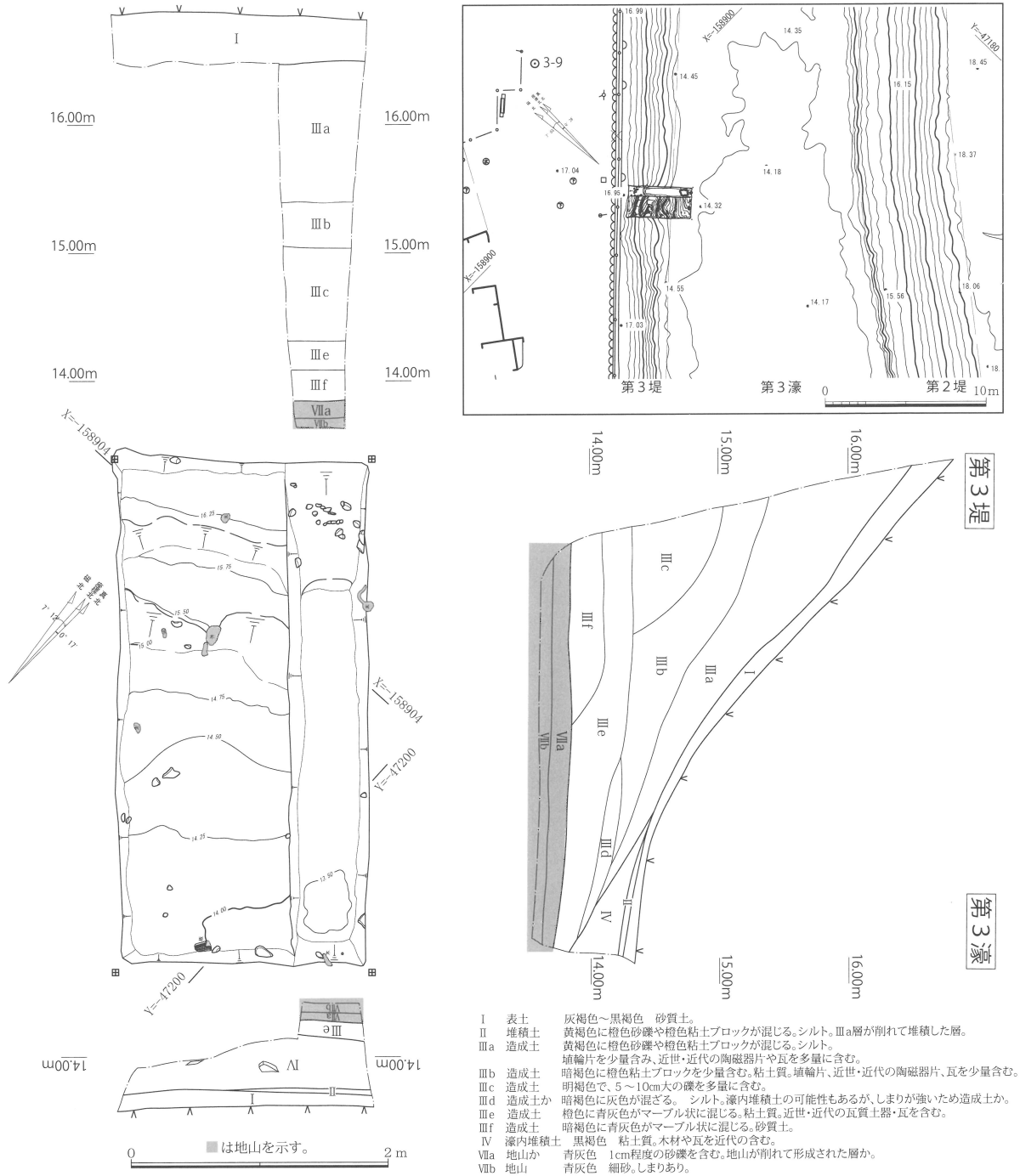
第4トレンチの南側に位置し、第3濠から第3堤にかけて幅2m、長さ4mで設定したトレンチである。また、第3堤の形成過程を確認するため、トレンチ北側に沿って幅70cmの断割を設けた。

確認された土層は、上から表土(I)、堆積土(II)、造成土(III)、濠内堆積土(IV)、地山(VII)である。地山はトレンチ西端で標高13.86m、東端では標高13.74mで検出され、地山が第3濠に向かって下がる一方で、第3堤側へはほぼ水平に伸びることが確認された。

造成土からは、埴輪片や瓦片に加え17世紀以降の陶磁器類や瓦質土器などが多数確認されたため、当トレンチに位置する現在の第3堤は、築造当時のものではなく後世に築かれたものであることが判明した。造成土は主に砂礫や粘土ブロックを含む硬い土で構成されるが、トレンチ西側で確認されたIIIc層は拳大の礫を主体とする非常に硬い層であった。このことから、同質の土を一挙に積み上げたというよりも、段階的に造成して堤を構築したことが推察できる。ただし造成土は連続的に堆積しているため、基本的にはほぼ同時期に積み上げられたものであろうが、明確ではない。当トレンチでは92点の遺物が出土しており、濠内堆積土からは近代の瓦片や木材が出土した。木材は水留めや土留め用として陵墓管理用に設置されていたものと考えられる。(足達)

④第6トレンチ(第9図、図版16-1~3)

第6トレンチは第5トレンチの南西側、今回の調査箇所最西端かつ最南端に位置し、第3堤から第3濠

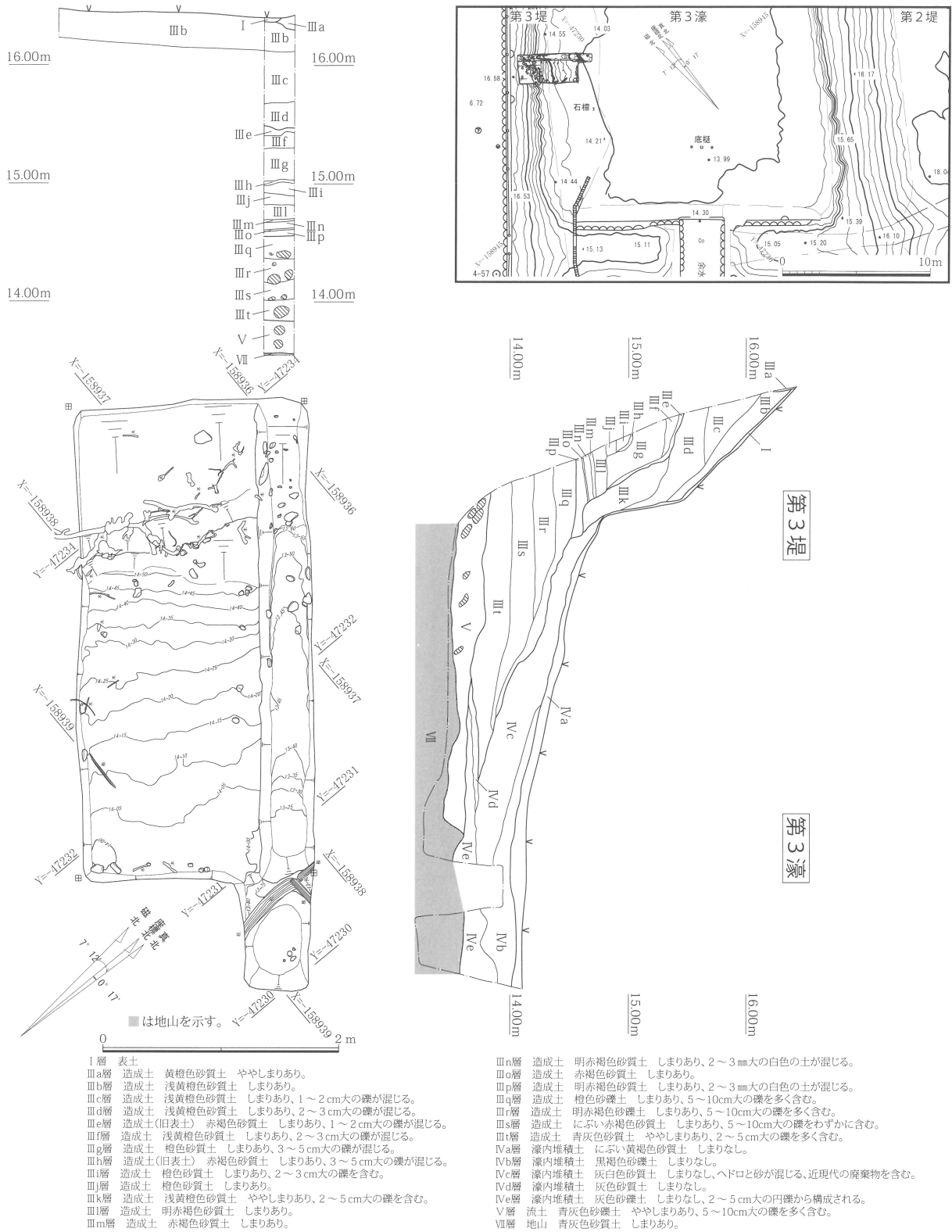


第8図 百舌鳥耳原中陵 第3堤 第5トレンチ平面図・断面図 (1/50、1/400)

にかけての情報を得るために設定した。確認された土層は、上から表土 (I)、造成土 (III)、濠内堆積土 (IV)、流土 (V)、地山 (VII) で、当陵を築造する際に構築された盛土は確認されていない。

堤状の造成土は3回にわたって作られており、それぞれ旧表土の砂の層と礫を含む層を交互に積んでいる様子が確認できる。ただし、遺物は含まれていないため、時期は不明である。

地表下0.5～1.2mにあたる標高1346～1364m付近で上面がほぼ平坦である地山を確認した。第6トレンチから北西へ約120mの地点に所在する飛地ほ号 (菰山塚古墳、菰山古墳) の調査では約1m高い標高約145mで地山を検出していることをふまえると⁽¹⁸⁾、第3濠は地山を削り出して作られたと考えられる。地山が立ち上がる様子は確認されなかったため、築造当初の第3濠は現在よりも幅が広がっていると考えられる。また、当トレンチで確認した堤状のIII層は地山を利用していないことから、築造当初のものではないと



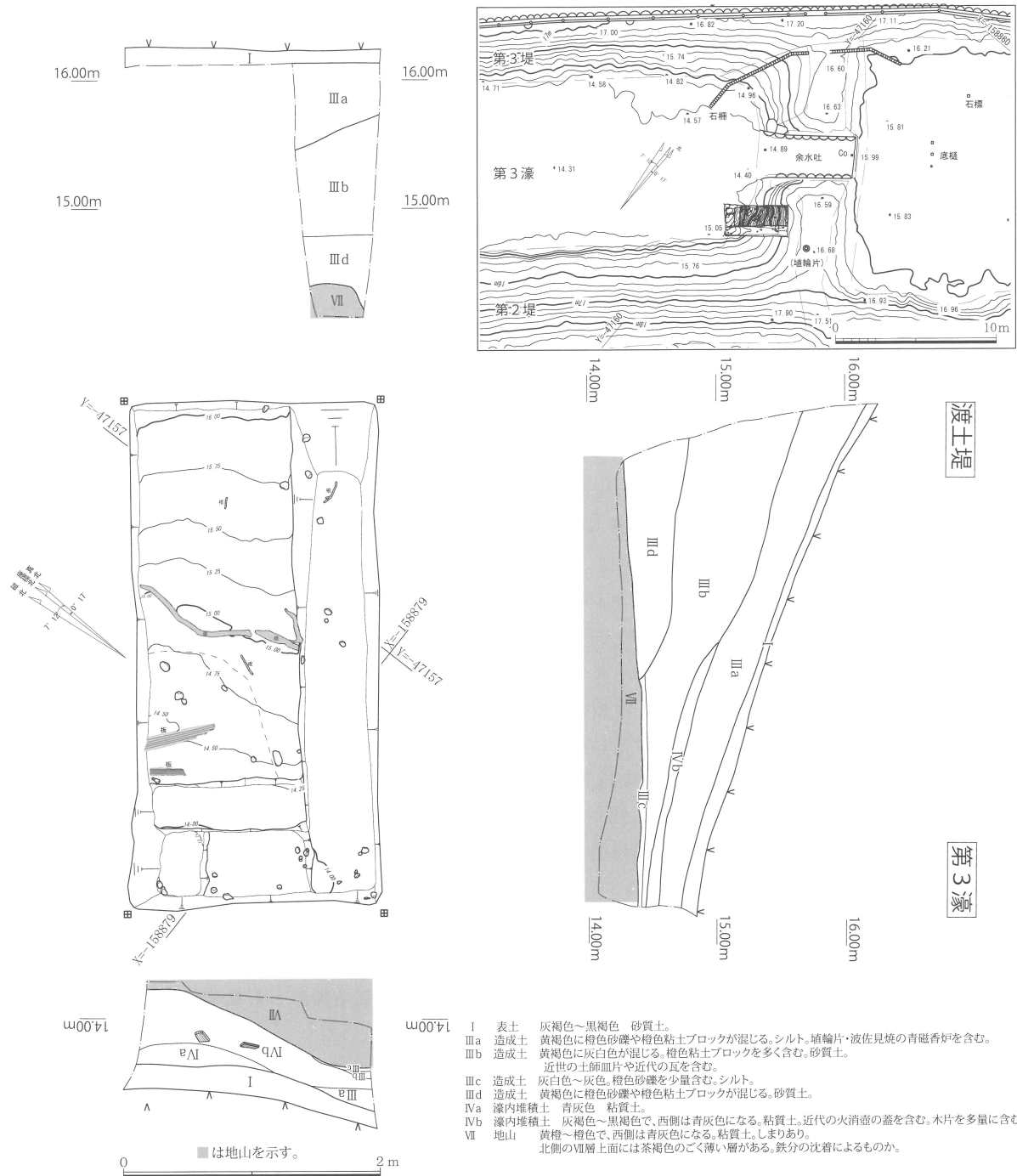
第9図 百舌鳥耳原中陵 第3堤 第6トレンチ平面図・断面図(1/50, 1/400)

考えられる。

第6トレンチでは7点の遺物が出土しているが、いずれも濠内堆積土に含まれており、第3堤や第3濠の築造時期は検討できない。

(田中)

(2) 渡土堤



第10図 百舌鳥耳原中陵 渡土堤 第4トレンチ平面図・断面図 (1/50、1/400)

①第4トレンチ (第10図、図版16-4~6)

第3濠第2渡土堤に直行する形で、渡土堤の南側斜面に幅2m、長さ4mの規模で設置した。また、渡土堤の形成過程と第2堤との接続状況を把握するため、トレンチ東側に沿って幅0.7m、長さ4mの断割と、トレンチ南側に沿って幅1m、長さ2mの断割を設けた。確認された土層は上から表土 (I)、造成土 (III)、濠内堆積土 (IV)、地山 (VII) である。地山はトレンチ東側で標高14.44m付近、西側では標高13.75m付近で検出され、第3濠側に地山が下がること、渡土堤側にやや下がりながらほぼ水平に伸びることが確認された。なお、北壁の土層からは東側に地山が落ち込むことが確認できるが、第2堤側に地山がどのようにつながるかは明確にできなかった。

厚く堆積する造成土には、埴輪片に加え17世紀以降の遺物が含まれることから、現在の第3濠第2渡土堤は古墳時代当時に築かれたのではなく、後世に築かれたことが判明した。先述のとおり第3濠は元禄期には埋まっていたと考えられるが、造成土が南北に傾斜しながら地山の上に直接堆積する状況を鑑みると、明治期の第3濠再掘削時に掘り残すことで渡土堤としたのではなく、第3濠内を掘削し地山を削った上でその土を利用しながら新たに構築したものと推察される。濠内堆積土(Ⅳb層)の上にも造成土(Ⅲa層)が堆積するため、Ⅲb層まで造成したのちにやや時間をおいてⅢa層が造成された可能性があるが、Ⅲa層からも17世紀代の遺物が含まれることや、造成土はいずれも類似した様相であることから、ほぼ同時期に若干の時間差を伴いながら段階的な造成が行われたと考えられる。なお本トレンチでは、木材を含めて29点の遺物が出土し、濠内堆積土からは近代の瓦片や木材が多数出土した。木材は水留めや土留めのために陵墓管理用に設置されていたものだろう。(足達)

(3) 第3濠・第2堤

①第7トレンチ(第11～12図、図版17-4～図版18-5)

第7トレンチは第3濠第1渡土堤と第2渡土堤の間に位置し、第2堤に直交するように設定したトレンチである。当初は幅約2m、長さ約10mのトレンチを設置する予定であったが、トレンチのやや南側で通路を兼ねた畔を設けたため、大きく二つに区分される。また、第2堤の第3濠側斜面下において、サブトレンチを伸ばすようにトレンチを新たに設置した。ここでは、それぞれのトレンチを南側から第7-1、7-2、7-3トレンチと呼ぶ。大きさは第7-1トレンチが幅約2.0m、長さ約3.2m、第7-2トレンチが幅約2.0m、長さ約5.8m、第7-3トレンチは幅約0.7m、長さ約0.9mである。本トレンチでは、第2堤築造のための盛土と地山を検出することができた。

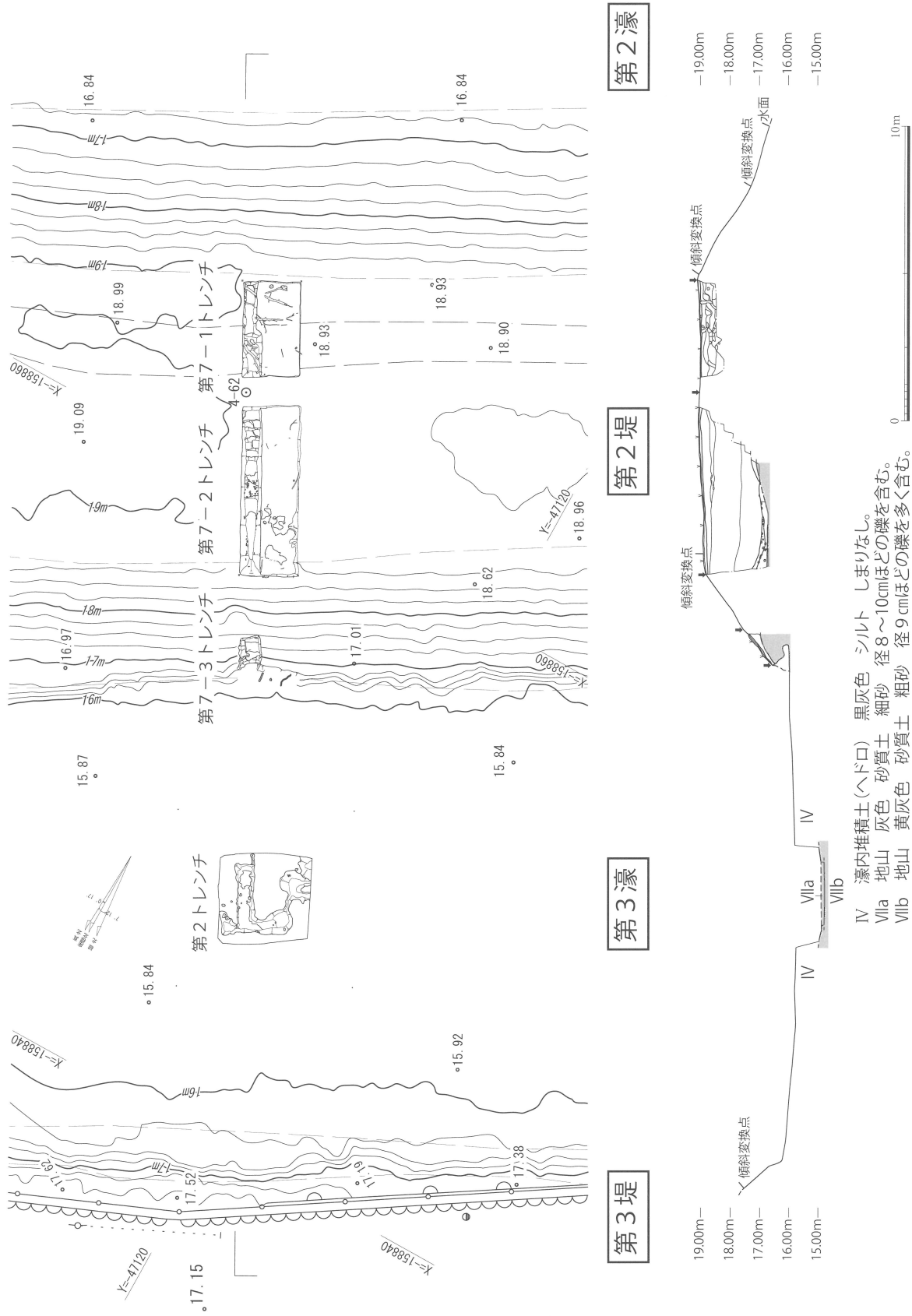
確認された土層は、上から表土(Ⅰ)、堆積土(Ⅱa～b)、近世以降の造成土(Ⅲa～r)、流土(Ⅴ)、盛土(Ⅵ)、地山(Ⅶ)である。造成土(Ⅲ)は約1.9mの高さで確認され、現状の第2堤の高さの要因となっている。造成土中からは、円筒埴輪片(第13図7、8)、16～17世紀頃の埴や瓦片(第14図5、6)、17世紀前～中葉頃の土師質甕(第15図33)、18～19世紀頃陶磁器片(第15図7)が含まれている。Ⅲa層の上側から円筒埴輪片、Ⅲg層から瓦片や陶磁器片が出土している等、下層ほど古いという訳ではなく、層位と遺物の年代の対応関係はみられない。

造成土の下からは流土(Ⅴ)と考えられる層を0.15mの高さで検出した。流土の上側からは龍泉窯系青磁器(碗)(第14図1)が出土した(図版18-3)。後述するが、これは15世紀末～16世紀前半頃のものであり、造成土の上限年代はこの頃になると考えられる。また流土中からは円筒埴輪片と石敷を構成していたと考えられる石材も多く出土した。

流土下の標高16.8～17.1m付近からは盛土(Ⅵ)と考えられる層を検出した。この土層はしまりがあり、上側に石敷と考えられる石材と円筒埴輪片がまとまって検出されたことから、盛土と判断した。ただ、土色が一定であることから、地山である可能性も残る。第7-2トレンチ北側附近はやや窪んでおり、第7-2トレンチ南側と第7-3トレンチではやや高くなる傾向が確認できる。後述する地山(Ⅶ)も同様であることから、元々の地形に由来するものか、あるいは意図的な施工かと考えられる。

なお、盛土(Ⅵ)上面から検出された石敷と考えられる石材の内6点について奥田氏に鑑定を依頼したところ、いずれも川原石であり、大部分の採石地は槇尾川と推定されること、葺石として運ばれたと考えられる石材であり、地山に含まれる石材ではないということであった。当陵の陪冢と考えられる収塚古墳の葺石と同様の石材であるという。これは、この石材を石敷に用いられたものと考えらるうえで肯定的な情報である。

流土下の標高17.1m付近からは地山(Ⅶ)を検出した。かたくしまっており、盛土(Ⅵ)とは明確に区別される。地山は第7-2トレンチ南側に向けてやや高くなっている。第12図では第3堤、第3濠、第2堤、第2濠の断面図(エレベーション図)を示したが、第2濠の水面は標高16.6m付近にあり、水面やや上側の標高17.3m付近には傾斜変換点がある。この傾斜変換点の付近は、築造当初の第2堤南側上面レベルに近いと推定されるが、そうであるとすれば第7-2トレンチ南側の標高17.1m付近の地山上面からはやや高くな



第12図 百舌鳥耳原中陵 第2堤・第3濠 第7-1・2・3、第2トレンチ平面図・断面図 (1/200)

- IV 濠内堆積土(ハドロ) 黒灰色 シルト しまりなし。
- VIIa 地山 灰色 砂質土 細砂 径8~10cmほどの礫を含む。
- VIIb 地山 黄灰色 砂質土 粗砂 径9cmほどの礫を多く含む。

ると考えられる。

このトレンチ内では先述したとおり、Ⅲa層、Ⅲg層、Ⅴ層を主として130点の遺物が出土している。造成土（Ⅲ）からの出土品は先述したとおり製作時期が異なるものが混じっているが、Ⅴ層からは円筒埴輪片や龍泉窯系青磁器（碗）など造成土よりも古い時期の出土品がみられる傾向があり、造成土が形成されたと推定される16世紀後半以降よりも前の時期における活動痕跡が反映されていると考えられる。さらに、第7-2トレンチ北側の流土（Ⅴ）や盛土（Ⅵ）で円筒埴輪片がまとまって出土していることから、第1堤と同様に、第2堤外側にも円筒埴輪が設置されていた可能性が考えられる。また、残存率は悪いが、第1堤を構成する石敷と同様の石材が検出されたことから、第2堤上面には石敷が設けられていた可能性もまた考えられる。

このように、第7トレンチでは第2堤についての情報を得ることができた。高さ1.9mもの造成土が確認できることから、築造当初の姿は現在とは大きく異なるものであったことがわかる。第3章で整理したとおり、第2堤では第7トレンチの他にも、百舌鳥部事務所の改築に伴い一般拝所（第2堤南側）の東側において複数回の調査がおこなわれている。平成24年度に実施された調査では、深さ約2.3mの掘削がなされ、地表面から1.8mほど下の標高16.7m付近で地山が確認されている。一般拝所付近でも第7トレンチと同様に造成土が分厚く確認されており、類似した様相をみることができると考えられる。また、築造当初の第2堤の様相についても断片的ながら情報を得ることができた。今後の調査でこれらの情報を検証する必要がある。（土屋）

②第2トレンチ（第12図、図版17-1～3）

第2トレンチは第3濠の中央付近に設置したトレンチである。第7トレンチの東壁ラインの延長上に第2トレンチの東壁が来るように位置を調整している。第12図は、第2トレンチの東壁と第7トレンチの東壁を通すラインで作成した断面図である。第3濠の濠内堆積土（ヘドロ）を掘削することになるため、トレンチ周りには足場と土留を設けた。トレンチの大きさはおよそ3m×3mである。トレンチは地山層を検出するまで掘り下げた。また壁が崩れないように中央付近でL字形にサブトレンチを設けて地山層をさらに掘り下げて土層を確認した。西側では水抜きのための釜場を設置している。

第3濠の水を抜き、濠底から掘削したところ、濠底地表面約0.8m下から地山（Ⅶa～b）を検出した。濠内堆積土（ヘドロ層、Ⅳ層）は第3濠で最も深いと考えられるところで高さ約0.8mである。第2堤斜面北西側には濠水の浸食によってガマになっている箇所（標高約16.2m）があり、ここが現在の水面であるとすると、水面から地山までの深さは最大で高さ約1.2mとなる。

地山（Ⅶa）は標高約15.0mから確認できる。約0.1m下からは別の地山（Ⅶb）が確認できる。第2堤の第7トレンチにおける地山は標高17.1m付近から検出されている。第3堤南西側にある当陵飛地へ号（丸保山古墳）では表土すぐ下の箇所から地山（標高約17.2m）が検出されていることをふまえると⁽¹⁹⁾、第3濠は地山を掘削することで造られたと考えられる。

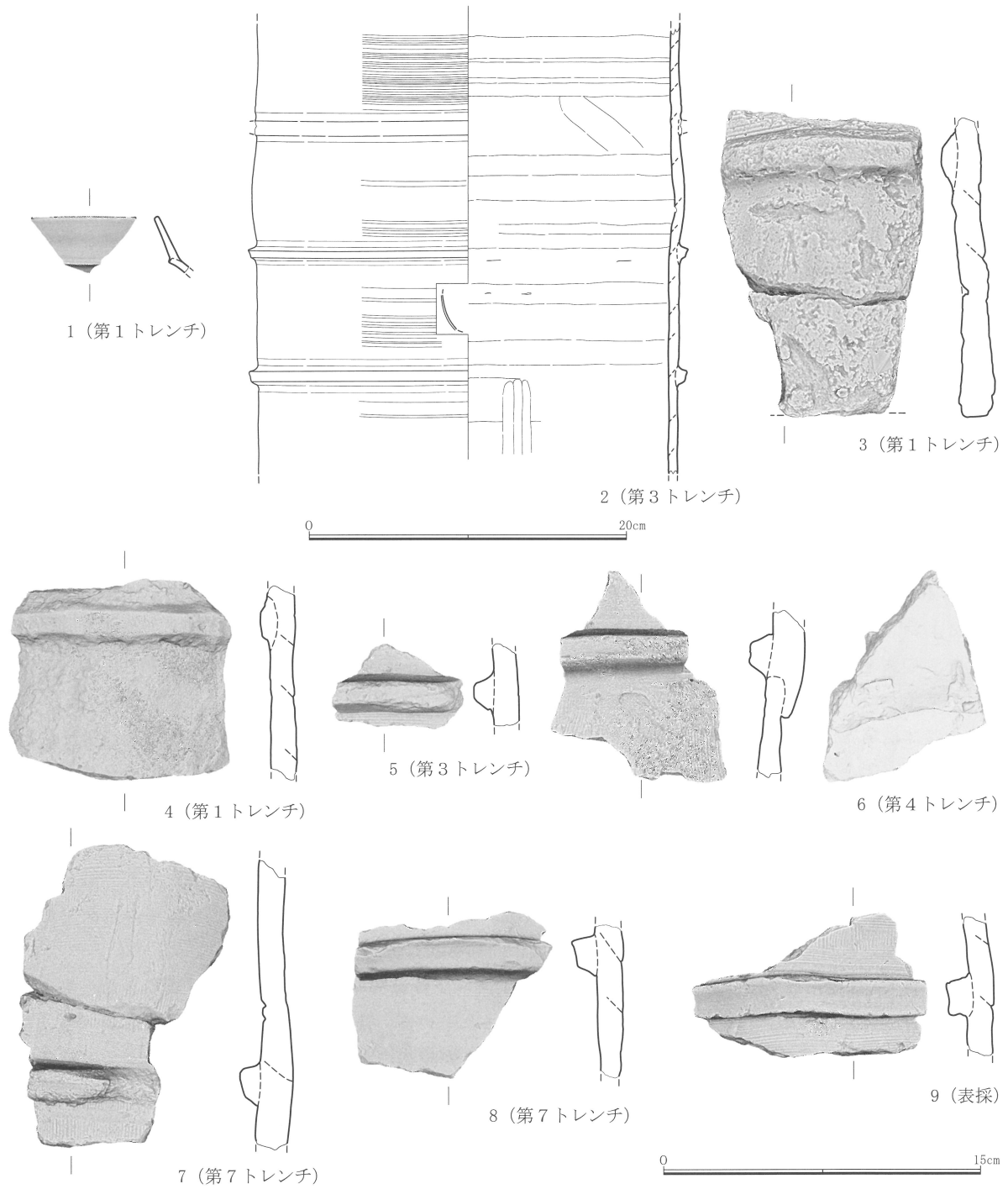
また、第2堤と第3堤を比較してみると、第7トレンチの調査で判明したとおり、第2堤上面には造成土が約1.9mの高さで検出された。築造当初の第2堤上面推定レベルは標高16.7～17.1mであり、第3堤上面（築造当初のレベルは不明であるが、現状で標高17.5m付近にある）とそれほど変わらないレベルであったようである。築造当初の第2堤の姿は、水面の標高16.2mから0.5～0.9mほどの高さしかなかったようである。

第2トレンチの濠内堆積土（Ⅳ層）からは近代～現代の計10点の遺物が出土した。（土屋）

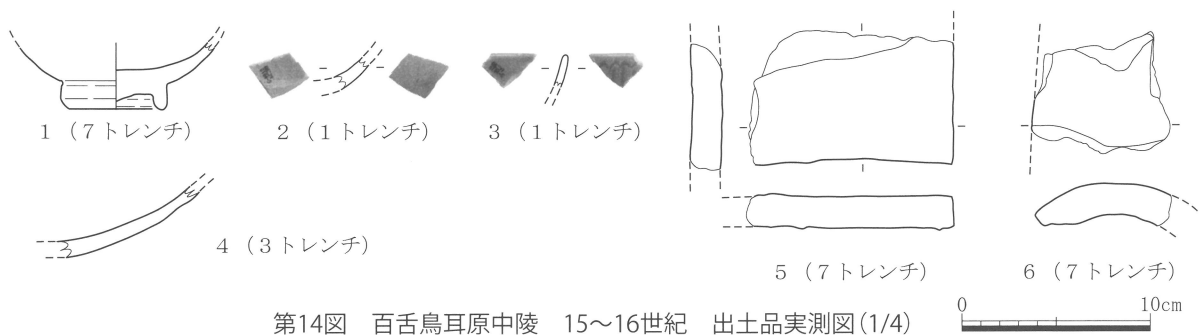
6. 出土遺物

（1）古墳時代遺物（第13図、図版19）

第13図は古墳時代の須恵器と埴輪である。structured lightを利用した3Dスキャナー（Revopoint MINI2）を用いて三次元計測をおこなった。1は第1トレンチの流土（Ⅴ）から出土した。須恵器ハソウの口縁であると考えられる。二次口縁と一次口縁の一部が残存している。二次口縁の高さからみて、陶邑TK208型式期頃のものと考えられる。



第13図 百舌鳥耳原中陵 須恵器・埴輪実測図 (2は1/6、その他は1/3)



第14図 百舌鳥耳原中陵 15~16世紀 出土品実測図(1/4)

2は第3トレンチの造成土下層(Ⅲj)から流土(V)上面にかけて面的にまとまって出土した円筒埴輪である。直径の約4分の1ほどの残存率で3条4段分の部位に復元できることを確認した。直径は推定約40cmである。図上2段目に円形透孔が確認できる。当陵でこれまでに出土した円筒埴輪は7条8段であり、透孔は3・5・7段目にあることをふまえると、本例は透孔は3段目か5段目に相当し、2～5段目の部位、あるいは5～8段目の部位であると考えられる。突帯間隔(突帯稜線上側間の距離)は、約11.5cmである。全体的に表面が摩耗しているため詳細な観察は難しいが、外面にはヨコハケがみられる。静止痕は明確ではない。突帯下側には突帯設定のためと考えられる凹線が確認される。上側は外形がわずかに彎曲する。

3は第1トレンチ流土(V)から出土した円筒埴輪の破片である。底部端がみられ、二段目下側までが残存している。底部端から第一条突帯の稜線上側までの長さは13.2cmである。第一段目外面にはタテナデ、第二段目外面にはヨコハケ、内面には右斜め上方向のナデがみられる。

4は第1トレンチ造成土(Ⅲn)から出土した円筒埴輪の破片である。5は第3トレンチ造成土下層(Ⅲj)から流土(V)上面にかけてから出土した円筒埴輪の破片である。6は第4トレンチ造成土(Ⅲd)から出土した円筒埴輪の破片である。外面は灰色であり須恵質である。外面にはタテハケあるいはナナメハケがみられ、残存部分ではヨコハケはみられない。突帯上側には突帯設定のためのL字状工具が当たった痕跡がみられる。本例は断面が分厚くなっており、内面には接合面がみられる。これは突帯下側あたりに積み上げ静止痕があり、この付近から積み上げが再開されたためであると考えられる。

7は第7トレンチ造成土(Ⅲa)から出土した円筒埴輪の破片である。突帯下側ではタテハケ、上側ではBc種ヨコハケがみられることから、突帯は第一条である可能性が考えられる。

8は第7トレンチ造成土(Ⅲg)から出土した円筒埴輪の破片である。9は第1トレンチ近くの渡土堤で表採したものである。外面には一次調整タテハケ、二次調整Bc種ヨコハケがみられる。突帯上側には突帯設定のためのL字状工具が当たった痕跡がみられる。内面には左斜め上方向のナデがみられる。(土屋)

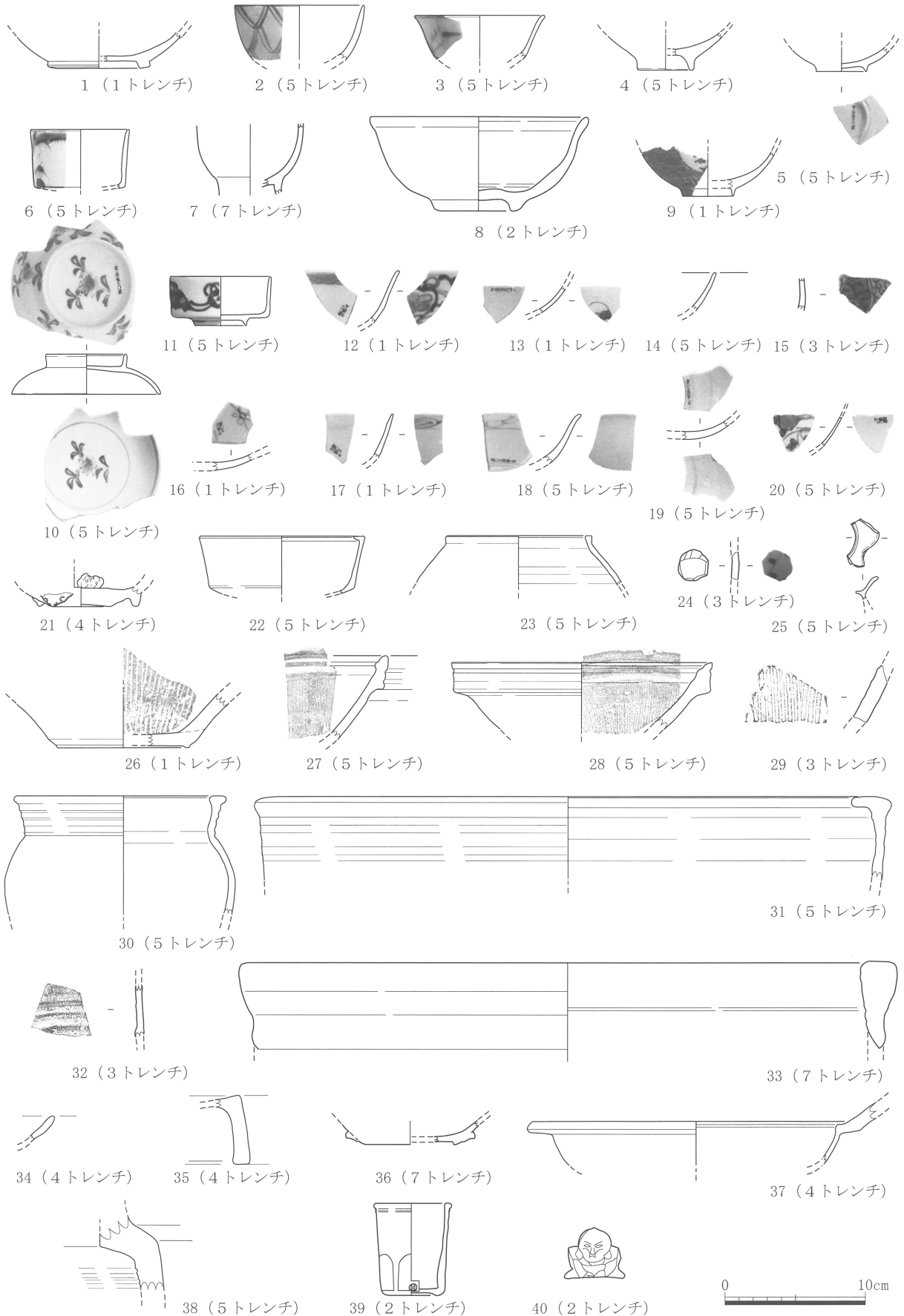
(2) 15～16世紀の遺物(第14図、図版20-1、2)

第14図は各トレンチから出土した15から16世紀の出土品である⁽²⁰⁾。なお、第14～16図の器種及び年代については續伸一郎氏によるご教示を得た。

1は中国産龍泉窯系青磁碗の底部で、第7トレンチのV層上面より出土した。残存高は約3.5cm、底部径は約5.0cm。15世紀。内外面は釉が施され、底部は露胎している。胎土には礫が多く混じり、1mm程度のくぼみを確認できる。内面にはロクロ回転、外面には縦方向のケズリが確認できる。高台は摩耗している。2は龍泉窯系無文青磁碗の胴部である。15世紀後半。3は龍泉窯系連弁文青磁碗の口縁部である。外面に細描き連弁文が施される。15世紀末から16世紀前半。2・3は第1トレンチのⅢu層より出土した。4は二彩唐津の大皿で、第3トレンチのI層から出土した。内外面は施釉されているが、外面の一部は露胎している。16世紀中頃から後半。5は16世紀後半から17世紀前半の磚で、第7-2トレンチのⅢa層より出土した。堺環濠都市で磚列建物に使用されていたものが、17世紀前半の火災で被熱したか。6は丸瓦で、第7-2トレンチのⅢa層より出土した。黒褐色を呈す。二次焼成を受けている。上面には被熱した物質が付着している。(足達・田中)

(3) 17世紀以降の遺物(第15、16図、図版20-3～21-4)

第15、16図は各トレンチから出土した17世紀以降の遺物である。1から32は陶磁器である⁽²¹⁾。1は武雄唐津の灰釉鉢で、第1トレンチのⅣa層より出土した。復元底径7.4cm。内面のみ灰釉がかかり、ハリ支えの目痕がある。外面は黄灰色。17世紀中頃から後半。2は肥前の碗で、第5トレンチのⅢa層より出土した。復元口径9.2cm。外面に二重網目文が描かれる。18世紀代。3は瀬戸の碗で、第5トレンチのⅢb層より出土した。復元口径9.2cm。19世紀以降。4は武雄唐津の碗で、第5トレンチのI層より出土した。復元底径4cm。内面に黄褐色の釉がかかり、ハリ支えの目痕がある。外面は白くざらつくが、元は施釉されていたか。17世紀中頃から後半。5は肥前の碗で、第5トレンチのⅢb層より出土した。復元底径3.6cm。18世紀初頭。6は肥前の蕎麦猪口で、第5トレンチのⅢb層より出土した。復元口径7.2cm。外面に笹文が描



第15図 百舌鳥耳原中陵 17世紀以降 出土品実測図(1)(1/4)

かれる。18世紀代。7は広東碗で、第7-2トレンチのⅢa層より出土した。残存高約4.5cm。18から19世紀。内外面に施釉が確認できる。8は近代磁器碗で、第2トレンチのⅣ層より出土した。器高6.8cm、口縁部径約15.5cm。内外面ともに施釉されているが、内面底部は一部露胎しており、焼成時に重ねた痕跡と考えられる。9は磁器碗で、第1トレンチのⅣa層より出土した。19世紀以降か。10は肥前の磁器蓋で、第5トレンチのⅢa層より出土した。口径10.6cm、器高2.9cm。輪状つまみをもち、草花の染付が施される。17世紀中頃から後半。11は肥前の碗で、第5トレンチのⅢa層より出土した。口径7cm、器高3.5cm。外面に七宝結文が描かれる。口唇部内面を釉剥ぎし、蓋付碗もしくは同形の碗を重ねて収納していたか。18世紀代。12・13・14は肥前の碗である。12は第1トレンチのⅠ層より出土した。17世紀代。13は第1トレンチのⅣa層より出土した。17世紀代。14は第5トレンチのⅢb層より出土した。復元底径3.6cm。17世紀後半。15は17世紀中期から後期にかけての肥前染付で、第3トレンチのⅣb層より出土した。施釉あり。16は初期伊万里の皿で、第1トレンチのⅣa層より出土した。17世紀前半から中頃。17・18は初期伊万里の碗で、17は第5トレンチのⅢa層、18は第1トレンチのⅢu層より出土した。17世紀前半から中頃。19は漳州窯産の皿で、第5トレンチのⅢa層より出土した。化粧土の上に絵付けする。16世紀末～17世紀前半。20は景德鎮の碗で、第5トレンチのⅠ層より出土した。17世紀前半。21は波佐見の青磁香炉で、第4トレンチのⅢa層より出土した。底部を除いて青磁釉がかかり、底部は淡い黄灰色を呈す。見込みと断面に鉄分や砂礫が付着する。17世紀後半から18世紀。22は関西系の灰釉火入れで、第5トレンチのⅢa層より出土した。復元口径10.8cm。18世紀代。23は関西系の灰釉土瓶で、第5トレンチのⅢa層より出土した。復元口径10.4cm。口縁部は釉剥ぎされる。18世紀代。24は17世紀後半の肥前の德利破片で、第3トレンチのⅣb層より出土した。外面は施釉されているが、内面は施釉されていない。25は灰釉陶器で、第5トレンチのⅠ層より出土した。器種不明。17世紀以降か。26は丹波すり鉢で、第1トレンチのⅢ層より出土した。無釉焼締。17世紀前半から中頃。27～29は堺すり鉢。27は第5トレンチのⅢb層より出土した。無釉焼締。17世紀後半。すり目が細かく、口縁部内面にかえりがつく。28は第5トレンチのⅢb層より出土した。無釉焼締。18世紀中頃。29は18世紀の堺すり鉢の体部で、第3トレンチのⅣb層より出土した。内面は明赤褐色、外面は赤褐色、断面は橙色を呈す。30は丹波焼の壺で、第5トレンチのⅢa層より出土した。復元口径14.6cm。18世紀代。31は信楽系の大甕で、第5トレンチのⅢa層より出土した。復元口径47.4cm。長石が溶け出したガラス状の粒が含まれる。17世紀後半から18世紀代。32は近世における丹波産の德利の一部か。第3トレンチのⅣb層より出土した。外面は赤褐色、内面は明褐灰色で焼成は良好。外面は施釉あり。

33から36は土師器や土師質の土器である。33は堺で見られる土師質の甕口縁で、第7-2トレンチのⅢa層より出土した。残存高約6cm、復元底部径約47cm。17世紀前半から中頃。内面では横ハケ、外面ではタタキのちナデ消した様子が確認できる。34は京都系土師器皿で、第4トレンチのⅢb層より出土した。口縁部はややふくらんで厚いが、体部はユビオサエにより薄く仕上げる。口唇部に煤が付着する。17世紀初頭。35は近世の土師質火消壺蓋で、第4トレンチのⅣb層より出土した。36は雪平鍋。第7-2トレンチのⅢa層より出土した。残存高約2cm、復元底部径約6cm。内面のみ施釉が確認でき、火が当たる外面底部は施釉されていない。18世紀。

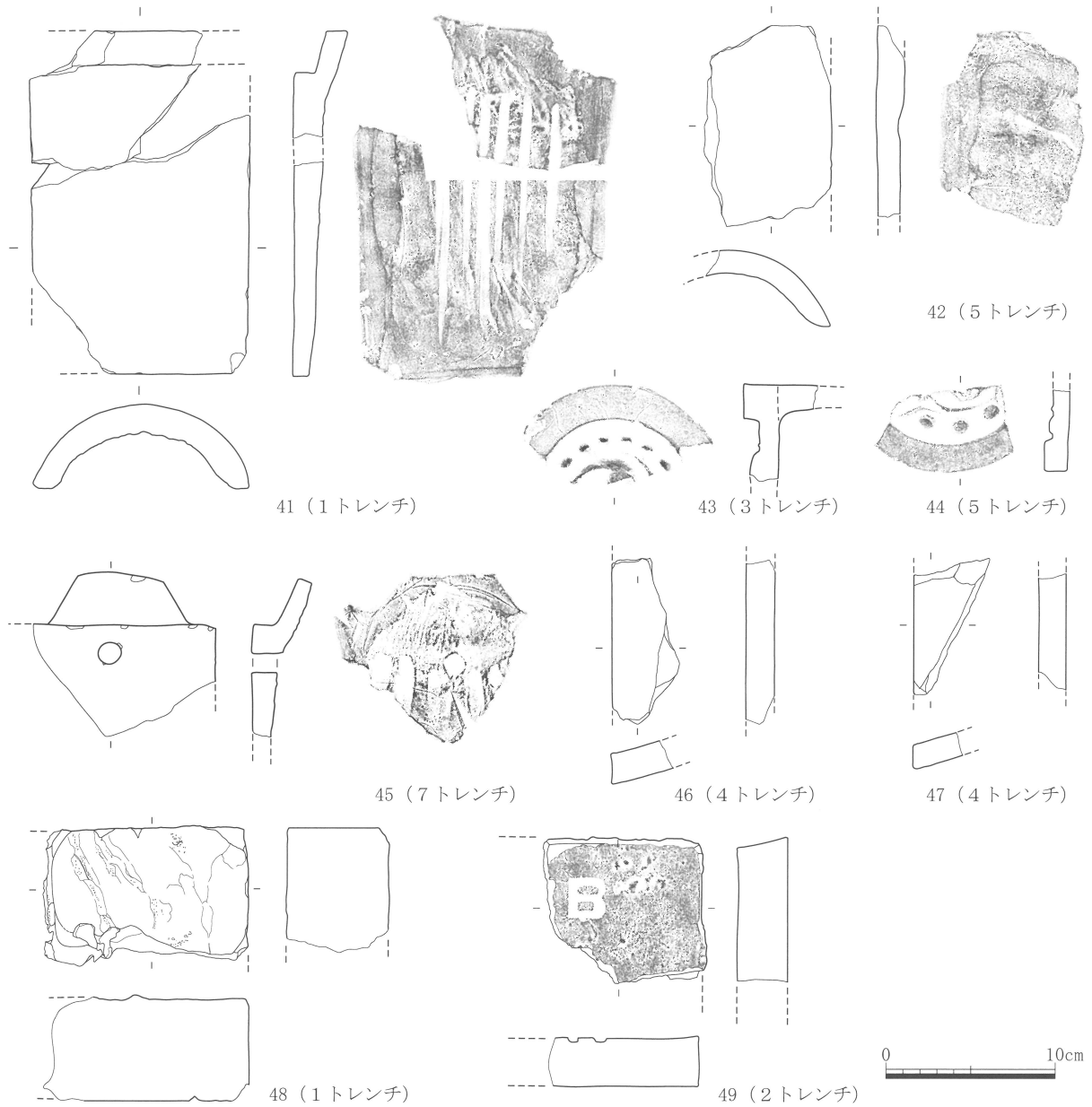
37は瓦質の焙烙鍋で、第5トレンチのⅢe層より出土した。復元口径24cm。体部外面に離れ砂が付着する。17世紀中頃。

38は陶製の硫酸瓶か。第5トレンチのⅢa層より出土した。19世紀以降。

39は陶陶酒デルカップで、第2トレンチのⅣ層より出土した。陶陶酒製造株式会社で製造される薬用酒、薬味酒。

40は福助人形で、第2トレンチのⅣ層より出土した。後背部に押印がある。白塗りをしてきた痕跡がある。明治時代以降。

41から47は瓦である。41・42は近代の丸瓦。41は第1トレンチのⅣa層、42は第5トレンチのⅢb層より出土した。43は近代の軒棧瓦で、第3トレンチのⅠ層より出土した。文様の一部が残存。44は近代の



第16図 百舌鳥耳原中陵 17世紀以降 出土品実測図(2)(1/4)

軒丸瓦で、第5トレンチのⅢb層より出土した。45は近世の丸瓦で、第7トレンチのⅢh層より出土した。46・47は近代の棧瓦。離れ砂が付着する。46は第4トレンチのⅢb層より、47は第4トレンチのⅣb層より出土した。

48・49は煉瓦である。48は第1トレンチのⅣa層より出土した。半分以上が溶けて黒色を呈す。表面に沸騰した泡状の痕跡が多数認められる。急激に高温にさらされたか。49は第2トレンチのⅣ層より出土した。平手に“B”の刻印が施される。長手は斜めにカットされている。平手は黒青色を呈し、それ以外は赤褐色。被熱しており、表面に沸騰した泡状の痕跡が認められる。(足達・田中)

7. 調査の成果

(1) 第3濠の形成過程

第1章の検討のとおり、近世の絵図や明治時代の公文書を調査した結果、第3濠が新田開発政策のために元禄4～8年に埋め立てられ、明治32～35年(1899～1902)にかけて、明治政府によって第3濠が復旧(再

掘削)されたことが明らかになった。また今回の事前調査の成果により、第3濠は築造当初からあった可能性が高いことを考古学的情報から裏付けることができた。具体的には、第1トレンチにおいて第3濠斜面を形成する地山と盛土を検出した。また第3トレンチでは円筒埴輪片がまとまって出土しており、第3堤上面に設置されていたものが崩落した可能性がある。一方、第5トレンチ、第6トレンチでは第3濠斜面を形成する地山の傾斜は確認することができなかつた。先述したとおり、第3濠の施工箇所は明治32～35年の工事の際の判断で決められたと考えられるが、その施工箇所がこの地点において誤っていたということであろう。第2図をみると第5、6トレンチ周辺では第3濠の幅がやや狭くなっていることから、おそらく築造当初の第3濠の斜面は現状より西側にあったと推定される。第1トレンチ、第3トレンチ周辺は第3濠が復旧された際、築造当初の第3濠に近いところが選ばれたと考えられる。

また第2堤の第7トレンチでは約1.9mの造成土が検出された。他にも百舌鳥部事務所の立会調査において坪所周辺では第2堤に約1.8mの造成土が盛られたことが確認されている。明治32～35年の第3濠復旧工事の際の掘削土が第2堤上に盛られたということもあるが、第2堤を嵩上げて荘厳にみせるという意図も想定される。また比高2mほどで東から西に僅かに傾斜する台地上に当陵が築造されているため、第2濠に水を貯えるには西側の外堤を東側より2m程嵩上げしなければならなかつたという指摘もある⁽²²⁾。第2堤の西側の大部分では、第7トレンチと同様に造成土で嵩上げされていると推定される。(土屋)

(2) 15～16世紀頃の仁徳天皇陵と大仙遺跡

今回の調査で15～16世紀頃の遺物が一定数確認された。第2堤の第7トレンチでは造成土より下層の流土(V)から出土しており、元禄4年～8年の第3濠埋め立て以前における周辺住民の活動が反映されている可能性がある。当陵南西部には大仙遺跡が広がっていた。大仙遺跡の発掘調査から、平安時代末～室町時代初期にかけて寺院が形成されたこと、室町時代からは寺院と一体化した城館(方形居館)が形成されたこと、16世紀までに廃絶したこと等が判明している⁽²³⁾。この遺跡からは16世紀の輸入磁器が出土しており、当陵で出土した龍泉窯系磁器等の15～16世紀の遺物との関連が考えられる。また大仙遺跡の城館の間には溝(堀)が検出されており、溝は当陵の方へと向いていて⁽²⁴⁾、当陵を意識した施工になっているという⁽²⁵⁾。これらの情報から、大仙遺跡に城館が作られていた頃、当陵の第2堤に城館の活動域が及んでいた可能性を推定することができる。当陵築造後の歴史を知る上で、興味深い情報である。(土屋)

(3) 当陵出土馬形埴輪・人物埴輪・犬(鹿)形埴輪の出土地点をめぐる議論

従来、女子頭部や他の形象埴輪片は、明治30年代以降に第3濠の修復(浚渫)にあたって、その北西部から出土したと伝えられてきた⁽²⁶⁾。しかしながら公文書の記録は残っておらず詳細は不明であること、各個体の内面には濠内堆積土と考えられるような粘質土が付着しており、濠内からの出土品であることは間違いないことが指摘されている。今回、当陵出土の馬形埴輪、人物埴輪、犬(鹿)形埴輪の出土地点にかんする文書を新たに確認したため、ここで紹介する。

・「明治三十三年 回議冊 地 號 第二類 珠 諸陵寮」『令和6年度 考証資料(諸陵寮回議冊)』(陵墓課所蔵)

以下、簿冊に綴じてある書類を時系列順に並び変えて、詳細を示す。アルファベットは簿冊に綴じてあった順を示す。執筆にあたり、筆者が改行箇所を改めるとともに句読点を追加した。また筆者が追加した情報は〔〕で示した。

① 翻刻

B. 明治33年7月22日付 守長 筒井幸四郎から諸陵頭 戸田氏共宛 報告(第八八号)

客月廿九日付ヲ以テ出願翌月七日出陵庶第七五号ニテ御許可相成候、仁徳天皇御陵三重墮々底不明土採堀所ヨリ別紙畧圖ノ如キ埴輪及同碎片数個発堀、直チニ同御陵器具入小屋へ取入置候間、此段及御届候也(陵議)。

乙第廿一部

明治三十三年七月廿二日 守長 筒井幸四郎 印

諸陵頭伯爵戸田氏共殿

C. Bの別紙〔袋とじ〕

仁徳天皇御陵三重隍（御本陵背後）々底ヨリ發掘埴輪碎片略圖

絵図〔図版22-1〕

A. 明治33年7月25日付 諸陵寮勤務 中川忠純から諸陵頭 戸田氏共宛 伺い（出陵庶第八五号）

仁徳天皇御陵三重隍々底不用壤土先般來採掘中二候処、今般埴輪及碎片數個發掘候趣、別紙畧圖相添守長ヨリ届出候右ハ、参考ト可相成モノモ有之哉ニ存候へ共、如何可致哉御届旁此段申進候也。

明治三十三年七月廿五日 諸陵寮勤務 中川忠純

諸陵頭伯爵戸田氏共殿

追テ本文埴輪之義ハ現今ノ池床ヨリ凡五尺許下發掘シ猶追々掘出シ候趣ニ有之候為、念申添候也。

D. 明治33年7月28日付 諸陵頭 戸田氏共から諸陵寮勤務宛 通牒（陵墳第二六号）

七月廿五日付出陵庶第八五号ヲ以、仁徳天皇御陵三重隍採掘中發見ニ係ル土輪之儀ニ付、來牒之趣了承、右ハ参考上極必用之モノニ付、此上破損ヲ來ササル様取扱、御用序ヲ以テ本寮へ差出相成候様、御取計有之度、此段申入候也

明治三十三年七月二十八日 頭

勤務宛

追テ本文土輪之儀、此上尚々發見モ候ハハ、可成破壊ニ至ラシナル様、掘採方守長へ御申通置、且其品ハ本文同様御取扱有之度候扱、又往年該御陵中ヨリ丸石ニ文字ヲ記シス候モノヲ掘出候事有之三重隍開鑿中又々右様之品見品見当候事モ有之候ハハ、守長ニ於テ保存致置、其摸様等早速届出候様、御申達置有之度、此段申添候也（陵議）。

②論点

この文書により、形象埴輪が明治33年（1900）7月に仁徳天皇御陵三重隍（御本陵背後）隍底から發見されたものであることがわかる。これは当陵第3濠の北側の濠底にあたり、發見者は守長の筒井幸四郎である。また絵図には、当陵出土の馬形埴輪頭部（管理番号：書50・L10-0-3、出土品展示目録：『埴輪Ⅱ』18）と胴部（書49・L8-0-1-2・L9-0-1-2、『埴輪Ⅱ』22）・人物埴輪脚部（L11-0-4、『埴輪Ⅱ』16）・犬（鹿）形埴輪（書50・L7-0-2、『埴輪Ⅱ』27）が「仁徳天皇御陵三重隍（御本陵背後）々底ヨリ發掘埴輪碎片略圖」として描かれており、これらの出土地点が当陵第3濠の北側の濠底であることがわかる。この出土は、先述した明治32～35年における第3濠の復旧に係る一連の工事によるものであると考えられる。なお、出土地点は厳密には第3濠の「現今ノ池床ヨリ凡五尺許下」とされ、池床から約1.515m下から出土したようである。先述した文書の調査成果をふまえると、元禄4年～8年に埋め立てられた箇所が凹んで池のようになっており、その池の底から約1.515m下で出土したということになる。

出土地点の候補についてであるが、「仁徳天皇御陵隍増設地実測図（縮尺1200分の1）」『陵墓地録 明治22年』明治21年（1888）（宮内公文書館所蔵、識別番号：2528）には明治21年時点の濠やその周辺の池が詳細に記載されており、参考になる。図版22-2には、出土地点の候補になりそうなところを示した。このいずれかから出土した可能性が考えられる。おそらく、当初は第2堤か第3堤、あるいは城内陪冢茶山か大安寺山に設置されていたが、第3濠中に崩落し、その後に埋め立てられた状態になっていたものが出土したのであろう。また絵図には描かれていないが、当陵出土の人物埴輪（女子頭部）（特1、『埴輪Ⅱ』15）についても同様の箇所から出土した可能性が考えられる。これらの遺物が墳塋ではない箇所に設置されていたことは重要である。大阪府応神天皇陵飛地ろ号（栗塚古墳）において馬形埴輪、犬形埴輪、人物埴輪等（IV-1期）が出土しており⁽²⁷⁾、形象埴輪を用いた古墳祭祀が既に陪冢で確立していたことをふまえると、城内陪冢茶山か大安寺山に設置されていた可能性が推定される。 （土屋）

まとめ

今回の調査は当陵北西側の第3堤、第2濠における保全整備工事計画を策定するにあたって、その基礎となる情報を収集するために実施したものである。まずは、調査とあわせて実施した現況測量の成果について述べた。今回は、第2堤から第3堤にかけての詳細な測量図を作成した。これまでに作成した測量図とあわせると、当陵では墳塋から第3堤にかけて全ての地形の情報を得ることができた。最新の測量図情報をもとに、3つの域内陪冢の特徴について整理した。

次に第3濠の形成をめぐる先行研究を整理し、江戸時代の絵図や明治時代の公文書を精査した。その結果、第3濠は新田開発政策のために元禄4年～8年に埋め立てられ、明治32～35年(1899～1902)にかけて、明治政府によって第3濠が復旧(再掘削)された可能性が高いことが明らかになった。

これらの所見をふまえて、今回の調査成果をまとめた。トレンチは、当陵第2堤北西側及び第3濠、第3堤に計7箇所設定した。第3堤に設置したトレンチ(第1、3、5、6トレンチ)では、現状の第3堤は基本的に17・18世紀の遺物を包含する厚い造成土によって造られていることが判明した。古墳築造当初の第3堤が残ったままその上に造成をして第3堤とした箇所と、濠を掘り返すと同時に土を造成して現状の第3堤を構築した箇所があることが指摘できる。例えば第1トレンチでは造成土の下から、築造当初の第3濠斜面を形成する地山と盛土と考えられる層を検出した。また第3トレンチでも造成土の下から第3濠斜面を形成する地山を検出した。これらの成果からみて、第3濠第1渡土堤から第2渡土堤にかけての場所では築造当初の第3濠が残っていると考えられる。一方、第5、6トレンチでは第3濠斜面を形成する地山は検出されず、濠を掘り返すと同時に土を造成していることを確認した。第3濠第2～3渡土堤にかけて第3濠斜面は現状よりも西側にあると推定される。

また、第3濠第2渡土堤に設定した第4トレンチにおいても、近世以降の造成土で造られていることを確認した。一方、第3濠東側渡土堤は地山削り出しで渡土堤が構築されたと考えられ、場所によって渡土堤の構築のされ方に違いがあるようである。

第2堤に設定した第7トレンチでは、造成土が約1.9mの厚さで確認され、その下から古墳時代の盛土層と石敷を検出した。同様の分厚い造成土は、百舌鳥部事務所改築に係る調査などを通して拝所周辺でも検出されており、第2堤西側の大部分において同様の造成土があることが推定された。この背景には、東から西に傾斜する台地上に築造された当陵の第2濠に水を貯えるために嵩上げする必要があったことや、当陵を荘厳にみせることが求められたこと等が考えられる。また第2堤に古墳時代の盛土や石敷があった可能性についても今回初めて確認された。おそらく第2堤は、第1堤と同様の構造であったと推定される。今後、第2堤で調査を実施する機会があれば、更なる検証が必要となる。

今回設置したトレンチから出土した遺物は、その大半が17世紀以降のものであったが、一部には15・16世紀の遺物も確認された。15・16世紀の遺物には中国産龍泉窯系のもも含まれており、中世の城館跡を含む大仙遺跡との関連性が示唆される。16世紀の堺環濠都市に関連するとみられる遺物も出土しており、周辺地域との関係性がうかがえる。また17世紀以降の遺物は造成土の上層だけでなく下層からも出土している。造成土の大部分は元禄4年～8年に埋め立てられた際の土であると考えられるが、明治32～35年に再掘削されるまで地表に廃棄された遺物も造成土中には含まれているのであろう。造成土や遺物の来歴を追求することは容易ではない。

今回の調査で得た所見をもとに、今後、第3堤、第2濠における保全整備工事計画を策定する予定である。

(土屋、田中、足達)

註

- (1) 森浩一『古墳の発掘』中公新書、1965年、p.41。
- (2) 中井正弘・奥田豊「伝仁徳陵古墳の周濠について－三重濠の新資料－」『考古学雑誌』第61第4号、日本考古学会、1976年。
中井正弘『仁徳陵 この巨大な謎』創元社、1992年。

- (3) 堺市博物館編『仁徳天皇陵と近代の堺』宮内庁宮内公文書館・堺市博物館・関西大学、2024年。
- (4) 石川雄大「明治期の仁徳天皇陵と地域社会―第三濠復旧をめぐって―」『仁徳天皇陵と近代の堺』宮内庁宮内公文書館・堺市博物館・関西大学、2024年。
- (5) 外池昇編『文久山陵図』新人物往来社、2005年。
- (6) 註(1)に同じ。
- (7) 第4図の作成にあたっては、註(8)～(17)掲載の土層断面図を再トレースおよび地山のトーン追加等で一部改変した。
- (8) 戸原純一「仁徳天皇陵前百舌鳥部事務所改築地区の調査」『書陵部紀要』第25号、宮内庁書陵部、1974年。
- (9) 戸原純一「仁徳天皇陵野犬防柵設置個所の調査」『書陵部紀要』第26号、宮内庁書陵部、1975年。
- (10) 土生田純之「百舌鳥部事務所車庫設置工事区域の調査」『書陵部紀要』第33号、宮内庁書陵部、1982年。
- (11) 徳田誠志・加藤一郎「百舌鳥部事務所改築工事箇所の事前調査」『書陵部紀要』第64号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2013年。
- (12) 徳田誠志・加藤一郎「百舌鳥部事務所建替工事箇所の立会調査」『書陵部紀要』第65号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2014年。
- (13) 戸原純一「仁徳天皇陵外堤西側護岸区域の調査」『書陵部紀要』第25号、宮内庁書陵部、1974年。
- (14) 土生田純之「百舌鳥耳原中陵第三掘堆積汚泥浚渫工事区域の調査」『書陵部紀要』第33号、宮内庁書陵部、1982年。
- (15) 『陵墓調査録平成16年』（陵墓課所蔵）
- (16) 徳田誠志「仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵導水管設置工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第58号、宮内庁書陵部、2007年。
- (17) 『陵墓調査録平成4年』（陵墓課所蔵）
- (18) 加藤一郎「仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵飛地は号コンクリート擁壁設置その他整備工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第57号、宮内庁書陵部、2006年。
- (19) 堺市文化財課の相馬勇介氏のご教示による。
- (20) 日本中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』、真陽社、2022年。
- (21) 九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年：九州近世陶磁学会10周年記念』、九州近世陶磁学会、2000年。
- (22) 樋口吉文「文献史料に記された仁徳天皇陵古墳（百舌鳥耳原中陵）」『堺市博物館研究報告』第44号、2025年、p.86。
- (23) 堀江門也『大仙遺跡発掘調査概要Ⅱ』大阪府教育委員会、1975年。
大阪府教育委員会『大仙遺跡発掘調査概要Ⅳ』、1996年。
城郭談話会編「大仙遺跡」『図解 近畿の城郭Ⅳ』戎光祥出版、2017年。
- (24) 永井正浩編『大仙遺跡（DS-2）発掘調査概要報告―堺区大仙町―』堺市教育委員会、2020年。
- (25) 海邊博史氏よりご教示頂いた。
- (26) 徳田誠志・清喜裕二「仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵の墳丘外形調査及び出土品」『書陵部紀要』第52号、宮内庁書陵部、2001年。
- (27) 吉澤則男「栗塚古墳」『羽曳野市内遺跡調査報告書―平成20年度―』羽曳野市教育委員会、2011年。



1 第1トレンチ全景（南から）



2 第1トレンチ 南側断ち割り



3 第1トレンチ 南側断ち割り 石材検出状況



4 第1トレンチ東側断ち割り 北壁



5 第1トレンチ東側断ち割り 東壁



6 第1トレンチ東側断ち割り東壁 石材取り上げ後



1 第3トレンチ全景 (南東から)



2 第3トレンチ東側断ち割り 東壁



3 第3濠側断ち割り 遺物出土状況



4 第3トレンチ全景 (西から)



5 第3濠側断ち割り 遺物出土状況



1 第5トレンチ全景（南東から）



2 第5トレンチ北側断ち割り 西壁



3 第5トレンチ全景（東から）



4 第5トレンチ北側断ち割り 東壁



1 第6トレンチ全景（東から）



2 第6トレンチ第3濠側断ち割り 北壁



3 第6トレンチ北側断ち割り 北壁



4 第4トレンチ全景（西から）



5 第4トレンチ 東側断ち割り 東壁



6 第4トレンチ 南側断ち割り 西壁



1 第2トレンチ全景（南西から）



2 第2トレンチ（北から）



3 第2トレンチ全景（北西から）



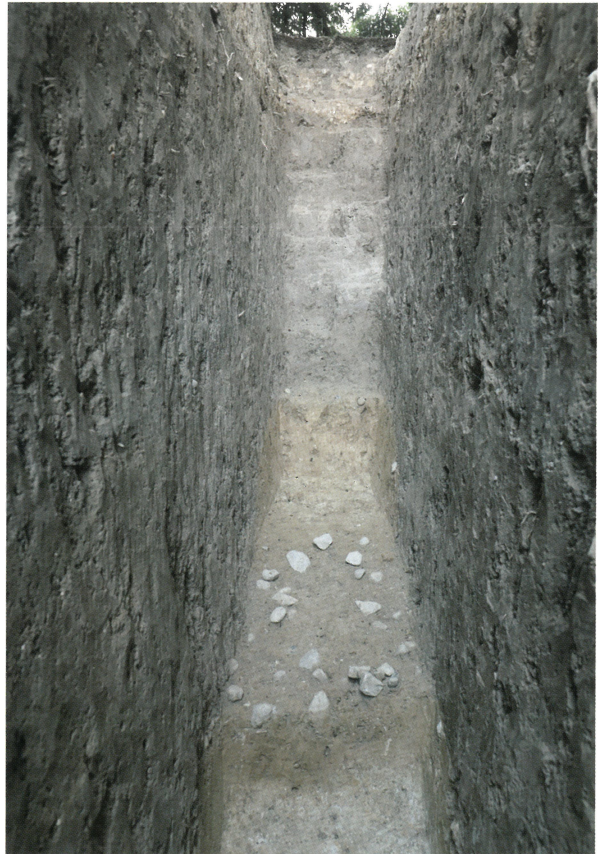
4 第7-1・7-2トレンチ全景（南東から）



5 第7-2トレンチ断ち割り（南東から）



1 第7-2トレンチ北東側断ち割り（南東から）



2 第7-2トレンチ北東側断ち割り（北西から）



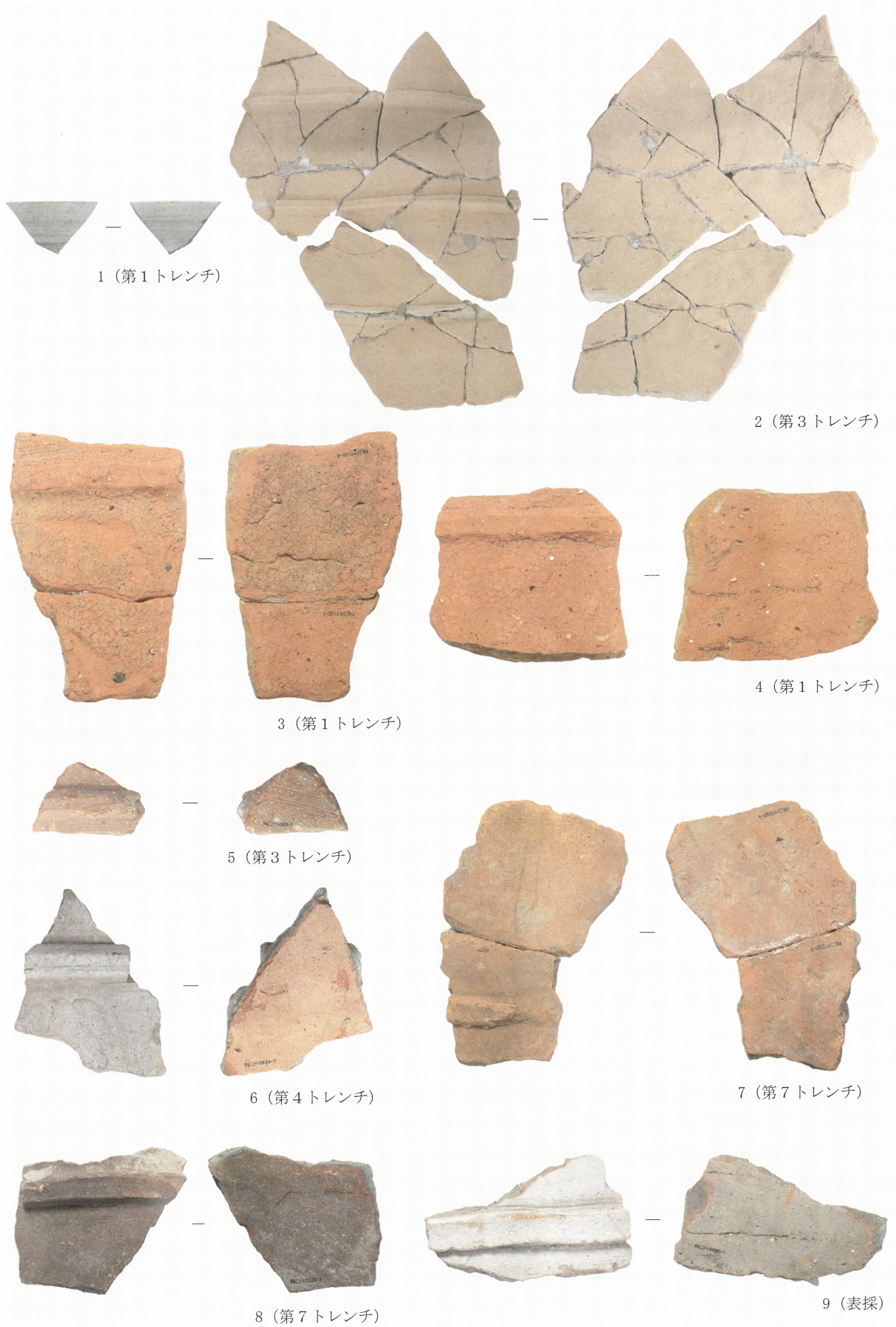
3 第7-2トレンチ龍泉窯磁器碗検出状況（南東から）



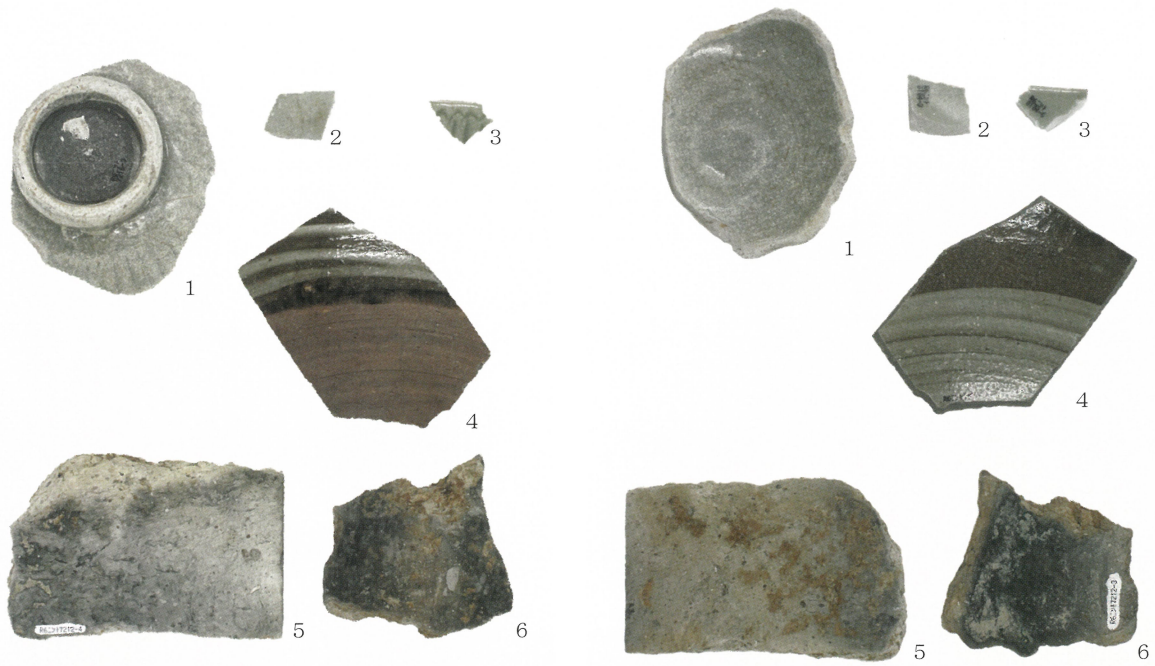
4 第7-3トレンチ（西から）



5 第7-3トレンチ（北西から）



1 須恵器・埴輪

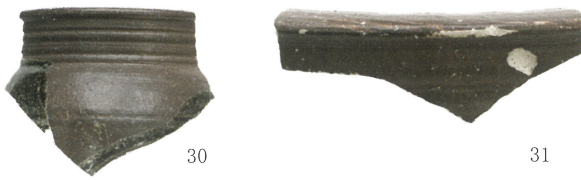
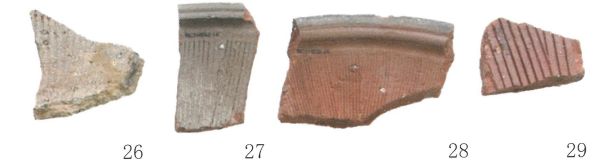
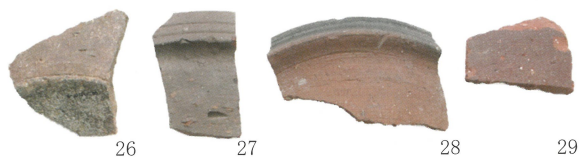


1 15・16世紀の遺物（外面）

2 15・16世紀の遺物（内面）



3 近世・近代以降の陶磁器類



1 陶磁器類・土師器・瓦質土器（外面）

2 陶磁器類・土師器・瓦質土器（内面）



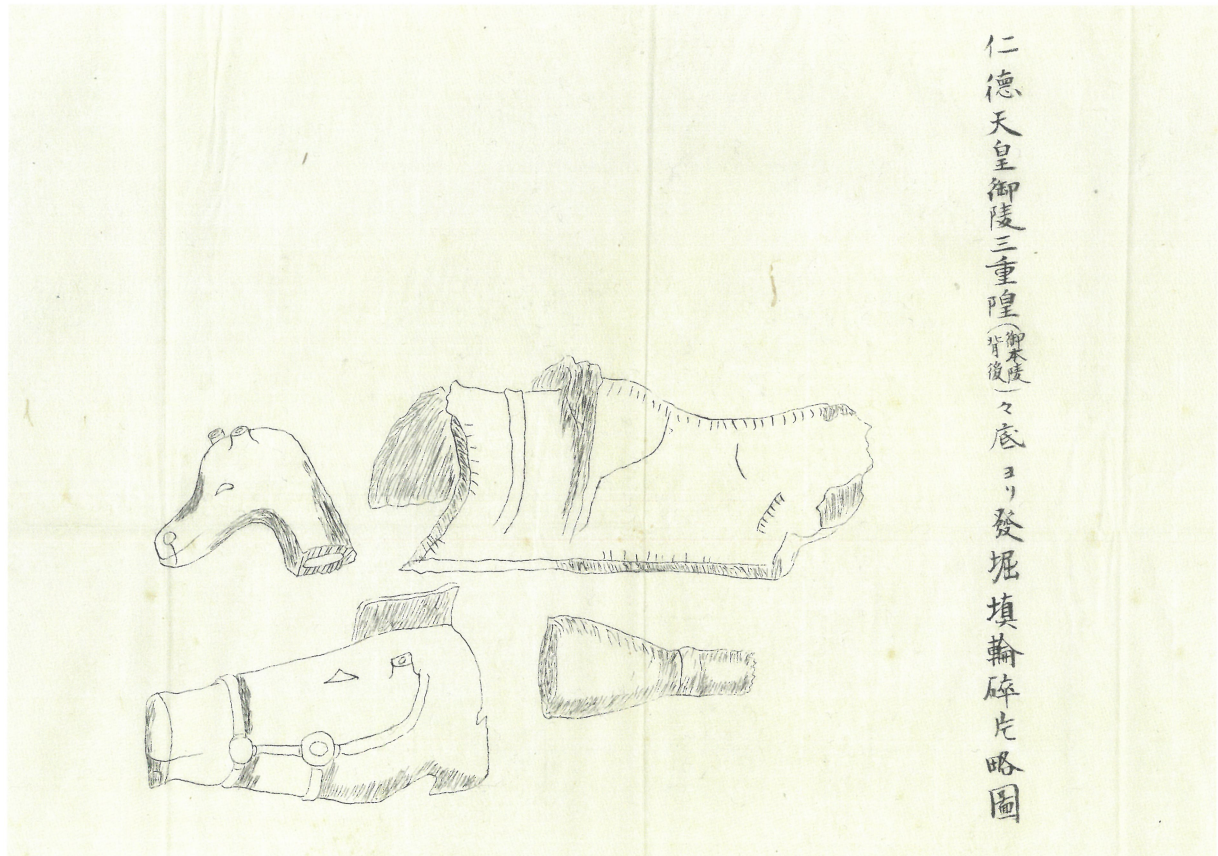
3 瓦



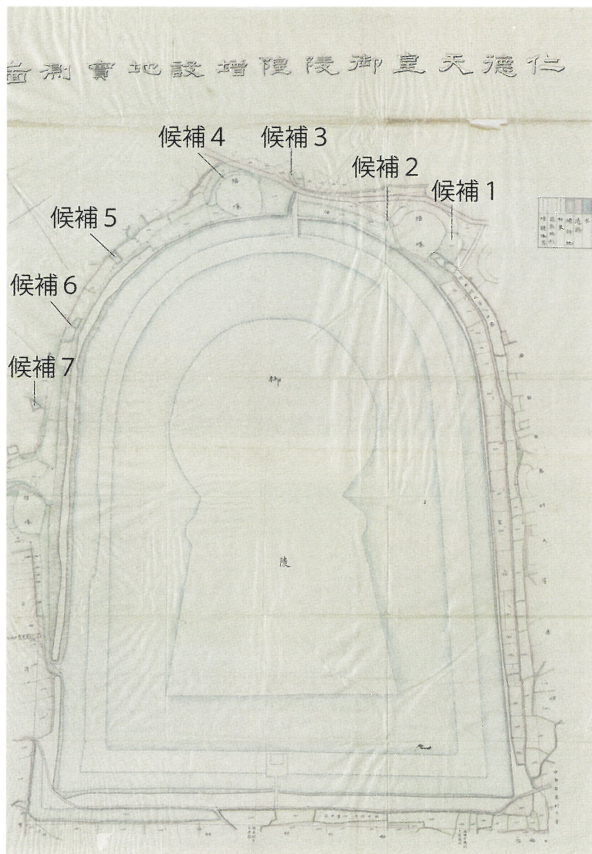
4 2トレ濠内堆積土より出土した遺物



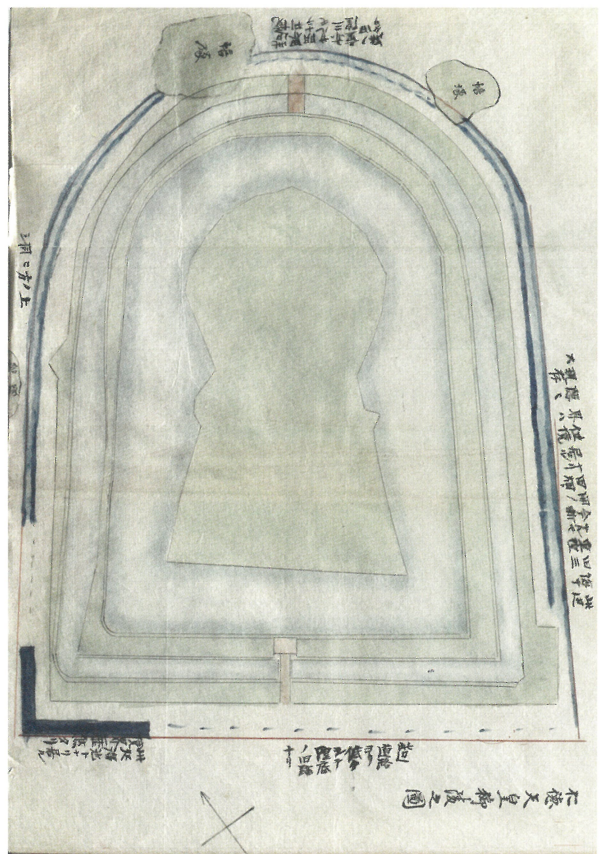
5 レンガ



1 仁徳天皇御陵三重隍（御本陵背後）々底ヨリ發掘填輪碎片略圖「明治三十三年回議冊第二類 珠 諸陵寮」



2 「仁徳天皇御陵増設地実測図」明治 21 年



3 「明治 27 年 仁徳天皇御陵之図」